少女、迷宮の主的な。

ぺんぎん村長

注意事項

【小説タイトル】
少女、迷宮の主的な。

【Nコード】
N0666CV

【作者名】
ぺんぎん村長

【あらすじ】
少女、水城小鳥、ダンジョンマスター。突然、ファンタジスタな神さまから異世界への片道切符を押し付けられて、メイキング迷宮チェケラ、なんて言われる。迷惑です、お帰しください。え、手遅れですかそうですか。そんな理不尽から始まる異世界での話。頑張れ、少女。負けるな、少女。このご都合主義は僕たち用なんだ、お前の席ないから。主人公は誰だって憧れる。※このあらすじは、大体は合っていますが、大体間違っています。

少女、セーラー神に合う的な。

唐突ではあるが、異世界という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか。正体不明な侵略者がやってくる、発達し過ぎた科学が存在する、仮想世界や電脳世界といった所謂ゲームの世界、平行世界も挙げられるだろう。しかし、他にもないだろうか。そう、ファンタジーな世界観を持つ類が。何を言っているのかと思うだろう、何が言いたいのかと思うだろう。つまり、ファンタジーな世界の話題を提供しようとしているわけだ。代表的なのは魔法だろう、あとは斬撃を飛ばす類の意味不明な剣技か。ゲームの要素もあったはずだ、Ｌｖ、職業、称号、スキル、ステータス。他にもあったと思うが、大した問題ではないだろう。

「ま、そんな感じの世界への片道切符をプレゼントしようとしているのさ。」

軽い口調で、適当に、そんな事を言う。楽しそうだ、と言わなくても見ればわかる程の笑顔を見せてくる。自称、神さま。神様という程の威厳は感じられない、だから神さま。外見もそうだ、身長は目算だが１５０ｃｍギリギリでボブカットより微妙に長い髪型にストロベリーブロンド、セーラー服を着ており紺色のホットパンツにガーターベルト、白いオーバーニーソックスを履いている。靴は用意しなかった、と神さま談。どこのキャラクターだ。しかし、異世界への片道切符。何故そのようなものを渡すのか。

異世界の王様曰く、勇者呼んで、発言力上げようか。
神さま達曰く、おや？召喚の儀式をしているな。おやおや、なら転生者とか転移者が増えても問題なし。呼ぶ方が悪い。
迷惑である。面倒事というか、厄介事というか、伝わってくるのだ。少女、水城小鳥はそんな事を回想しながらも心の中で愚痴をこぼす。
——ものすごく迷惑だ。何故に私なんだ。
「いや、突然こっちに引っ張ったのは悪かったさ。お互いに都合というものがあるのもわかるよ？これでも良心的な方さ、こうやって会話が出来る位には、ね。」
一瞬だけ笑顔を崩す神さま。確かに、突然な事で反応が悪い小鳥であったが：神にしては良心的：という考えに至る。何故だ。
「そうか。では、別の誰かにしてくれないか。正直に言ってしまうと、異世界、魔法……寝言は寝て言えと、私は思っているよ。」
「残念なことに、君からすれば手遅れって言うやつだね。ボクに呼ばれた時点で戻ることは出来ないし戻せない。覆水盆に返らずってね。まぁ、そんなキミにアドバイスだ、神託にするほどでもないね。んんっ…では、神さまにでも縋ったらどうだい？……あ、ボクが神さまだね、じゃあ無理だ。諦めなさい。」
流石は神さまですね、できの悪いステマにすら劣る。などという残念な感想が頭に浮かぶ小鳥。

「……他の神さまに縋るという選択肢は？」

「キミは人だろう？神さまの前で他の神さまを話題に挙げるなよ、王の右腕が別の王をリスペクトしているようなものだよ。やめておいたら？ボクは気にしないけどさ。」

「気にしないと言う割には、気にしている様に聞こえるよ……はぁ。」

「まぁね、プライド位はあるさ。話は変わるけどさ、焦ったり、怒ったり、泣いたり、喜んだりとかしないんだね。他の神さまの所だとそんな感じだよ？」

「…私だけじゃないのか。いや、私以外にも残念な事になった人がいるのか。」

自分だけではないことに多少驚いた小鳥は、自分以外にもいたことに安心した。だが、小鳥は自分を含めて救おうとは考えない、助けようともしない。そんな事が出来るのはヒーローやヒロインといった連中だ。所謂、主人公といった存在。更に言えば、正義のヒーロー。画面越しにしか出てこないなら、自分がやってやると叫ぶ人もどこかにいるだろう。だが小鳥は、叫ばないし叫べない。神さまに呼ばれただけで主人公になるわけではないのだから。小鳥が主人公になるとしたら、それは異世界に着いてからだろう。今この時は、オープニングが始まる前の開始１分と言ったところが丁度いい。

「いるね、数はそれぞれだけどさ。なんだっけ、神さま転生？テンプレ転生？みたいだよ。わざと殺して手違いでしたお詫びに転生させましょうってね。」

「神さまが人を殺すのか……そんな神話もあったな。それと、突然だったから現実味がしないだけで十分驚いているよ。」

「うん、神さまは人を殺すよ。所謂、間引きってやつでさ、増えよ富めよとは言ったけども増えすぎなんだよ。人だってやっているんだ、神さまだって間引き位出来るんだよ。……うんうん、現実味がなくてもいいんじゃない？焦るよりいいでしょ。それじゃあ、話を戻そうか。キミには異世界に行ってもらう、死んでないから転移ってやつだね。でも、ただで転移したら意味がない。ボクからすれば、興醒めもいいところさ。だから、特典なり、恩恵なり、加護なり貰ってもらう。必要ないならそれでもいい、ライオンに裸で突撃する様なものだけどね。」

「ライオンに挑むなんて無理だな、私にそんな強さはないよ。」

「だよね。じゃあ、続きだ。ボクは勇者をやれなんて言わない。魔王だって、種族の頂点ってだけで探せば見つかる位にはありふれているよ、倒せるかは別にしてね。そんな事は他にやらせればいい。ボクはね、キミに迷宮を作って欲しいって思ってるんだ。ダンジョンマスターって言えばいいのかな？」

「………迷宮？」

迷宮。有名なものだとミノタウロスがでてくる迷宮だろうか、この神さまは小鳥にミノタウロスの役をやれと言っているのか。否、そういうことではない。神話に出てくるような、英雄を作るための迷宮ではない。神さまが言っているのは、ファンタジー小説に出てくるような摩訶不思議、意味不明な迷宮のことだ。これは魔法なんだ、と言えば片付けられる事と同じだ。これが迷宮の力さ、なるほ

どわからん。

「そうだよ、理由は簡単だ。過去の勇者、英雄が全部壊したのさ。洞窟や遺跡とかは残っているんだけどさ、迷宮は残っていない、つまりダンジョンは無くなったんだ。だから作る、簡単でしょ？」

「国を作るゲームを聞いたことはあるが、似たようなものか？」

「似てるね、キミ以外にもダンジョンマスターをやらせるらしいから、文句は聞かないよ。さて、恩恵とかどうする？１つだけね。」

「１つだけなのか、意外と少ないと言えばいいのか？」

「いやいや、貰えるだけましだよ。神さまが個人を気に掛けるなんて遥か昔の話だからね。あとはダンジョンマスターになってから頑張ってよ、これが迷宮の力さってね。」

「そうか……では、歳をとりたくないな。」

「……へぇ、不老かい？」

「いや、極端な言い方をすれば修理の必要がないアンドロイドでもいい。」

「…あぁ、なるほどね。不老じゃなくて状態維持ってことか。へぇ、ふぅん……じゃあそれでよしっと。キミも準備はいいかい？」

「……戻らないのか。いや、いつでもいい。」

「うんうん、キミは面白いよ。諦めがちっていうか、面倒くさが

りなとこがね。さて、少し急いで説明したけど、説明不足かもね。でも文句は言わないでよ？勇者召喚の後始末がボクを待っているのさ。文句は勇者に言ってくれ、召喚に引っかかるやつが悪いんだ。」

そんな会話で、別れの挨拶なんかもなくて、私も神さまも気にすることもなく。私はダンジョンマスターなる不思議なものになった。

――初めまして異世界、そしてこんにちは。

少女、異世界チュートリアル的な。（前書き）

長い説明って疲れませんか？取扱説明書は投げるもの。

少女、異世界チュートリアル的な。

ダンジョン、迷宮、ラビリンス。迷子の迷子のお嬢さん貴女のお家はここですよ、フフフ。そんな場面が出てくるような迷宮なのだが、小鳥がいる場所はそんな場面とは無縁だった。６畳位の空間、出口なし。中央には西洋風の机と椅子、机には照明に使えそうな燭台に光る球体が飾られている。そんな部屋と呼べるのか怪しい場所で少女は佇んでいた。いや、呆然としているのかもしれないが。

「…………」

少女、水城小鳥、花も恥じらう少女、ではない。むしろ不良に近い存在である。御年１６歳にして風紀委員副会長、兼剣術家、兼良心的な海外マフィア首領の孫娘。黒である。小鳥は気にしていないが、マフィアは番犬のお世話になっているような連中だ。そんな殺伐とした場所に生まれて育ったせいか、力こそが正義だ、と言わんばかりに風紀委員会に入り会長に続いて不良を辻斬り、風紀を乱したものを辻斬り、校則を破ったものを辻斬る。そんな少女であるが、性格は意外と大人しい方である。異世界では関係ないが。

「……さて、立っていても仕方がない。家探しとしゃれ込もうか。」

小鳥は壁に手を当てて探ってみるが、６畳程度の広さしかないのだ、すぐに手持無沙汰になってしまう。異世界、それも出口のない密閉空間ですぐに行動に移ることができるほどには心の傷は浅かったようである。彼女が、次に探そうとして目に付くのは、やはりというか燭台である。むしろ一番最初に気づいたと言ってもいい。では、なぜ調べなかったのか。怪しい場所で怪しい燭台が自己主張している。怪しすぎるのだ。好奇心猫をも殺すと言ったところだ。しかし、

調べないわけにはいかない、他には机、椅子、床だけなのだから。

「背に腹は代えられない、と言うところか？」

小鳥は、燭台に触れるが特に反応はなかった。少し明るくなった事が反応と言えば反応か。しかし、それだけ。ファンタジーなら激しく輝いて何かしら進展するのがお約束なのだが、ご都合主義は起きなかった。そんなに甘くはない、と言いたいのだろうか。

彼女は、椅子に背を預けて思考を巡らす。

——特に反応はなかったと言っていい。いや、気づかない程度の反応だったのかもしれないが。他に何がある？少し明るくなった位か？他にはあったか？他に反応がなければ動きようがないんだが……
…ん？動きようが、ない。動けない。動いていない。動いていない？例えば、動いていなかったらどうだろうか。どこかに電源みたいなものがあるんじゃないか？そこから始まる、とか。

「ふ、む」

小鳥は燭台を手にとって角度を変えてみたり、振ってみたりするが動いた様子はない。叩いても反応はなかった。では、次は？と考えて、声をかけることに決める。

「……起きろ」

＜＜……Yes,　my　master.　Wake　up.＞＞

——動いた。何故か納得出来ないが、取り敢えず問題ない。

「おはよう、私は水城小鳥。いや、小鳥、水城だ。お前の名前は？」

＜＜Good morning, my master ” kotori”. I don't have my name. Please give me my name. ＞＞

「名無しか、なら九十九だ。九十九、私と同じ言語に合わせられるか。」

＜＜Wate a little.…………改めて、初めまして主コトリ。ツクモといいます。＞＞

「ああ、初めまして。でだ、九十九。私のこと、九十九のこと、この場所のこと、現状の打開策とか、あれば教えてくれないか。」

＜＜では、簡潔に。主コトリはダンジョンマスターです。主風に言うならば、建国ゲームのプレイヤーです。ツクモはダンジョンコアと呼ばれるものです、ゲームのコントローラになりますね。ただし、どちらもゲームで例えましたがゲームではありません。マスターの敗北、死亡、コアの消失でダンジョンは機能停止、または崩壊します。この場所とは、ゲームでいうボーナスエリアですね。ダンジョン最奥、ダンジョンを攻略し終えた攻略者が主と戦う場所でもあります。所謂、隠しボスと言ったところでしょう。現状の打開策は九十九とチュートリアルを始めましょう。＞＞

ゲームでの例え、わかりやすいと言えばそれまでなのだが、死亡などといった不穏な言葉もでてくる。しかし、それでも異世界なのだから常識が違うことも普通だ、と考える小鳥。

「チュートリアル、か。まるでゲームのようだ、化かされている気

分になる。……九十九始めてくれるか？」

＜＜はい、主コトリ。まず初めに、ツクモは主コトリの知識を情報として記録しています。コアはマスターの知識をバックアップしていると捉えてください。次に、この世界ではゲームの要素が含まれています。Ｌｖ、職業、、スキル、称号、ステータスといったものです。敵を倒せば成長しレベルが上がる、わかりやすいですね。職業も然り。スキルは種類があります。学習して得たもの。知識を取り込んで得たもの、インストールと言えますね。生まれながらに持っていたもの。称号は、曖昧なまま決まることが多いです。噂が、二つ名が、技名が、何が称号になるかわかりません。ステータスもゲームに出てくようなものですね。だからと言って、ステータスで決まるわけではありません。頭や心臓を打ち抜けば人は死んでしまうの同じですね。＞＞

「ほぼ、ゲームのような世界だな。」

＜＜概ね、その理解で正しいでしょう。見方を変えると自分の状態を目視化した世界、とも取れますが。＞＞

自分の状態を目視化した世界。聞こえはいいが、よくよく考えて見れば、張りぼてに鍍金を貼り付けて周囲に威張り散らすガキ大将がいるような世界。つまり、ステータス至上主義の世界。楽観的に、頭の悪い方向に考えればそうなる。俺の攻撃力はお前より上、これで終わりだっ、といった脳筋な世界の出来上がりだ。出来が悪すぎるから少し、頭のいい考え方をしよう。ステータスだけでなくスキル、称号の付加価値による状況の変化、ついでにＬｖと職業を考えることが普通な世界。ふ、馬鹿め。罠にかかったな、愚か者がっ。そんなタクティクスな世界。ステータスに縛れていると言えば、聞こえは悪いがそれが常識だ、と言われればそうなんだ、納得。と言

える世界だろう。更に、今度は頭を捻った考え方をしてみよう。そもそもそれらはゲームの住人の常識である。彼女、小鳥はそんな世界に来てしまったが、元々はプレイヤー側の存在だ。ならば、物理法則もある程度は通用するだろう。頭を柘榴のように散らしたり、その心臓を棘槍ったり、裸スカイダイビングで大地の肥やしにする。ボスが倒せないなら、筐体を壊せばいいじゃない、プログラムに勝てないからって物理的に勝つなよ。といった、アントワネットなルール世界である。

——考えるに、それらを一つにした世界。これに近い世界。そんなところか。

「ところで、自分のステータスを確認する方法は？」

＜＜一般的にはスキルの鑑定を持つ、道具による精査、教会の洗礼ですね。主はツクモを使えば問題ありません。ステータス、なんて言えばわかるほどゲームチックではありませんから。＞＞

「当然だ、そこまでゲームと近かったら叫んでいた所だ。じゃあ九十九、私のステータスを映せ。」

＜＜はい、主コトリ。＞＞

名前
小鳥　水城
種族
かぐや

職業
迷宮の主
称号
剣術家　辻斬り御免　剣鬼　剣姫　剣器　剣の嬢　悪法の番人　香具山人

Ｌｖ．０

ＭＰ　１５００
ＳＴＲ　７０
ＳＰＤ　１４０
ＭＩＮ　７８０
ＶＩＴ　７０（∞）

スキル
剣術　危剣物　大気剣　異剣交換　剣力乱用　剣克記念　言刃

「…………………九十九、解説。」

＜＜はい、主コトリ。主のわからない所を選択してしてください。
別画面に表示されます。＞＞

種族　かぐや
不変。状態維持とも言う。不変なため、基本的には不老である。不死なみの再生力があるが不死ではないため即死した場合は蘇らない。

称号　辻斬り御免
辻斬りを繰り返し続けた結果、すれ違う瞬間だけ目視不可能な居合剣を放てるようになった。

称号　剣鬼
相手の武器が剣だった場合のみ、どんな技を放たれようが打ち合い、競り合いで優位であり続ける。例、魔法剣士の魔法を斬り捨て御免。

称号　剣姫
自身の剣術を見た相手に魅了の呪いをかける。ただし、自身のＭＩＮが相手より高い場合のみ。

称号　剣器
どんな剣を扱っても適応する。極端な例、勇者でもないのに勇者の剣が使える。

称号　剣の嬢
自身の姿を見た相手のＭＩＮを半減させる。端数斬り捨て。否、切り捨て。

称号　悪法の番人
悪には悪のルールがある。正義という名の悪の元、初撃確殺の呪いを武器に与える。ただし、相手の悪の証拠を自身が知っている必要がある。
正義が勝つのではない、負けたやつが悪なのだ。

称号　香具山人
種族、かぐやから香具山。別名、富士山。異世界に存在している不死の霊峰、この山の頂上で不死の薬を燃やした逸話から、攻撃時に相手の不死を拒絶する。
また、香具の山から迦具の山となり、異世界の火の化身、火之迦具土を意味することで火や熱の類に影響されない。剣による攻撃に弱くなる。

「…………ここまでしか確認してないけど、迷宮の主って必要ないよね。」

＜＜素晴らしいですね、主。それと、喋り方が変わっていますよ。＞＞

「…ちっ。」

＜＜申し訳ありません、主。さて、他に気になるものはありますか？＞＞

「……はぁ、後回しにする。それよりも迷宮の作り方を優先して。」

＜＜わかりました。まずは、迷宮の説明から始めます。簡潔にまとめますと、血管、抗体、細菌と考えましょう。対価を支払うことで、血管を伸ばし抗体を増やすことで細菌を駆除する。それだけですね。＞＞

少女、未だ続くよチュートリアル的な。（前書き）

長すぎる説明。耐えがたい苦痛。発症する、ボケないと死んじゃう病。

少女、未だ続くよチュートリアル的な。

「そう。じゃあ、対価は何？」

対価。等価交換の概念から連想される言葉。何かを得るには何かを捨てなければいけないのだ。商品が欲しければ、金を対価に。彼女が欲しければ、右腕の内側を対価に。イケメンが欲しければ、自分の個性を対価に。そういった、ギブアンドテイクで持ちつ持たれつな関係の用語である。これ、要注意ね。

＜＜主に解かりやすくいうと、供物、魔力、魔素といったものになります。＞＞

「……供物？　魔素？」

＜＜はい、物質と元素って言えばいいですかね？　迷宮は手放しで大きくなるわけではありません。人が食事からエネルギーを得ているように、迷宮にもエネルギーは必要です。この世界では元素という考え方ではなく、全ては魔素で出来ている。そんな考え方が一般的です。なので、供物は魔素である。とも言えます。それを魔力に変換して使うことで迷宮は大きくなるのです。これらから、魔力はエネルギーである、と言っても問題はありません。また、魔素と魔力は厳密な区別はありません。光が粒子であり波である、と似ていますね。＞＞

意味不明である。いきなり語られても、全部についていけるとは限らないのだ。ファンタジーな異世界の一部を現代知識に無理矢理合わせているようなものだろう、物理法則が起訴しているぞ。満場一致で物理法則の勝訴である、慈悲はない。

「魔力、か。……迷宮を作り変える、必要になる魔力をリストにして映せ。」

＜＜はい、主コトリ。＞＞

魔力コスト＝ＭＰ消費量

・６畳１間で１マス増築　４００
・１マス改築　１００
・マスの移動　５００
・扉の設定変更　３００
・マスの設定変更　３００

※マスは隣接部分のみ設置可能です。また、設置時に隣接部分を扉に変更出来ます。

「……これだけか？」

＜＜はい、わかりやすくていいですね。魔力コストは変更できません。作りやすいですが、その分、高めになっていますね。思い描いたイメージを幻視できるというなら、魔力コストを減らせますが、そんな人は碌な生き方はしません。＞＞

「そうだな。しかし、これだと迷宮を作るのに長い時間がかかるな。いや、人力よりましか。」

＜＜炭鉱ではありませんからね。主コトリ、説明を続けても？＞＞

「あぁ、頼む。」

＜＜続けます。迷宮を作り続けていくと一定の広さ、または一定の深さで迷宮の入口が出来るようになります。これは迷宮を増築したことで迷宮空間内での魔素の量が飽和してしまうからです。この現象は、増築した空間内の物質を魔力コストで魔素に変換することで起きます。空気の膨張と似た現象ですね。なのでうっかりしていると、迷宮に入口が出来て、攻略者がやってきて。などといった悲惨な事になってしまいます、目も当てられませんね。＞＞

「その魔素を回収することは出来ないのか？」

＜＜口を縫い付けた状態で、ご飯を口の中に運べますか？＞＞

口が開かない状態で、ものを口の中に入れる。普通の生活をしている人には出来ないと言うだろう、特殊な人は鼻から入れると豪語するだろう、入院した経験がある人はチューブを使うと答えるだろう。何故そのような話をしているのか。別段、意味はないと言える。そもそもファンタジーを物理法則で説明することが間違っているとも言えるのだから。間違っていることを熱心に説明して意味があるのか、あるとすれば時間は有意義に使いましょう。そのくらいだろう。説明をする時には注意しなければいけない事がある。短く、簡易で、ユーモアに。無駄に難しい言葉を並べ立てて説明しようものなら、周りからは馬鹿丸出し、滑稽に見えるだろう。だが、本人は至って真面目なのだ、残念ながら。今回も同じ事だ。小鳥と九十九の会話は本人たちにとってとても大事な事である、しかし、現状からの進展がない、所謂チュートリアル長すぎ。詰め込みは良くない、だが、

ゆとり教育は歴史に流された。さようなら、ゆとり教育。初めまして、勤勉教育。何が言いたいのか、セーラー神からのお達しだ。次に進め。

＜＜さて、長々と説明してきましたが、実際に迷宮を作ってみましょう。どのようにします？＞＞

「縦横９マス、縦軸中心１マスずつだな。片方はこの部屋、反対は扉と入口。まずはこれでいいだろう。」

＜＜なるほど、道場みたいにするのですね。わかりやすいです。＞＞

「私のステータスだと、１日３マス、全工程で２７日か？」

＜＜そうですね、魔力が２４時間で回復するので２７日です。余裕を持って１ヶ月といったところでしょう。＞＞

「じゃあ、そのように。」

＜＜はい、主コトリ。＞＞

セーラー神、黒幕になりきる的な。（前書き）

締まらない。シリアルはコーンフレークだと思う。

セーラー神、黒幕になりきる的な。

ダンジョン、迷宮とも呼んでいるソレ。歴史上に存在したことはわかっているが、勇者や英雄が駆逐してしまったために、最近までは確認されなかったもの。そう、されなかったもの。

何が言いたいのか。過去形なのだ、表現が。過去形になっているのだ、説明が。何が言いたいのか、なんて。わかりやすすぎる。陳腐な問いかけみたいなものだ。説明するまでもない事だろう、だが、あえて言おう。何が言いたいのか。

つまり――

「くそがぁっ！！何だってんだ、ここはよぉっ！！晴れのちアシッドスライムとか、ふざけてやがるっっ！！」

「叫ぶ位なら走れっ、溶けるぞ！！」

空から、アシッドスライムが降ってきたり――

「無理ッス、出来ないッス、死んじゃうッスよぉぉお！！」

「黙れ、死にたいのか！！」

「意味がわかんない、ここ廃都じゃないの？何でゴーレムなのよ、

何でゴーレムなのよぉぉ！！」

廃都の街並みが、街道と街壁を残して、全てゴーレムに変形したり
――

「……今の見たか？」

「……見た。」

「…見間違いか？」

「いいえ、見間違いじゃないわ。」

「じゃあ、俺たちは何を見たんだ？」

「それは、ほら、あれだよ、あれ。クジラ？」

「……クジラは、島を食べない。」

島を丸呑みするクジラが、海から現れたり――

「怯むなぁぁぁあ！！撃てぇーーーっ！！」

「消えろ、亡霊どもぉぉーーっ！！」

「…………ありえない、亡霊だろう？光に弱いんだろう？何で浄

化されないんだよ、なんでだよ、な゛ん゛て゛だ゛よ゛ぉぉぉ……。
」

「ぉぉ、神よ。我らに救いを……。」

無意味な抵抗を嘲笑い続ける、亡霊の軍勢が行軍していたり――

つまり、ダンジョンは存在している。いや、新しく生まれたのだろう、どこかの誰かを主にして。摩訶不思議で、意味不明で、理不尽の詰め合わせ。迷宮。ダンジョン。ラビリンス。呼び方なんてどうでもいい、勝手に呼ばれ始めるのだから。今この時は、拍手を送ろう。喝采を送ろう。スタンディングオベーションだ。ついでに言葉も添えよう。

「ハッピー・バースデイ。お誕生日おめでとう、なんてね。」

誰が言ったのか、誰に言ったのか。些細なことだ、気にするまでもない。阿鼻叫喚、もしくは狂喜乱舞、いや、狂忌乱武の真っ只中で無粋な事を考えてはいけない。さて、迷宮は生まれた。これからも生まれてくるだろう。世界の住人は大丈夫だろうか、と心配してしまう人もいるだろう。その気持ちは尊いものだ、しかし、心配するには遅すぎた。大丈夫なわけではないのだ。迷宮なんて遥か昔の御伽噺の扱い、空想の産物、幻想の置き物を。そんなものが、産声を上げげて暴れるのだ。無神論者が神から右ストレートを食らうようなものである。神速の右手、相手は粉微塵になる。結果はお察しである。

「さて、迷宮が生まれてきたね。こんな事もあろうかと、歴史書の

新しいページに一筆加えておいたボクって、頭いいんじゃないかな？」

そんな事を呟く、セーラー服の何某。何様なんだろうか、神さまである。わかりきった事だ、こんなふざけたやつ。何故に神さまなのか。

「じゃあ、新しい歴史を読み上げようじゃないか。」

世界は再び観測した
御伽噺だった存在を
空想だった産物を
幻想だった置き物を

世界は再び観測する
実体験の存在を
現実からなる産物を
真実からの贈り物を

「物語でいう、プロローグの終わり。いや、すでにプロローグは終わっている気分なんだよね。困ったな、そうだ。プロローグ２の終わりにしよう、うん。やり直しやり直し。」

そんなくだらない事で雰囲気を、空気を変える。流石、神さまである。自重しろ、特にセーラー服。

「……んんっ、あーあー。うん。では………。

物語でいう、プロローグ２の終わり。予定通りの０番目、これから始まる１番目。１，５番で勇者が出てきて、２番で見つかる転生者。ファンタジーな異世界の、ファンタジスタな神さまと、残念極まる連中の、それはそれはくだらない、もしくは真面目にシリアスな、そんな感じの物語。

完璧なんじゃないかな、これ。ボクって意外とセンスあるんじゃない？ちょっと自慢しに行こっと。」

やはり、締まらない。セーラー神、チェンジで。

セーラー神、猫を脱いで寝るだけ的な。（前書き）

ご都合主義、なるべくなくしたいですね。

セーラー神、猫を脱いで寝るだけ的な。

セーラー神。詳しく言えば、パチモン系猫かぶり風ボクっ子なんちゃってセーラー神。そう、やつである。何故、話題に挙げたか。ファンタジー異世界を恐怖のズンドコに叩きつけた一因だからだ。もう一曲、否、もう逸曲選ぶんだ。ファンタジー異世界がズンドコされる。フルコンボ、もとい、フルボッコだ。こんな神がいていいのか、と文句も言いたくなるだろう。

だが残念なことに、セーラー神。ファンタジー異世界では意外にも、大事なポジションにいる。教会の聖女や、神の代弁者が全力でヨイショするようなポジションに。つまりは、だ。

＜＜ボクのんんっ…………私の聖女、私の可愛い聖女。聞こえていますか？＞＞

「はい、お呼びですか、我らの女神。」

＜＜私の可愛い聖女。貴女の瞳には、今の世界はどう映っていますか？＞＞

「今の世界、ですか。そうですね、日々命のやり取りがあるとはいえ、概ね平和と言えるのではないでしょうか。」

＜＜そうですか。私の可愛い聖女、私は貴女に、いえ、日々の平和を過ごす全てのものに悪い知らせを齎してしまうのですね。＞＞

「………それは、どのような？」

＜＜私の可愛い聖女。この知らせを、早急に広めてください。世界各地で、数多の迷宮が産声をあげました。同時期に、魔王達が活発になり、人々の中から上位種が現れるようになりました。原因は何処かで行われた、勇者召喚の儀式。世界は勇者を受け入れたことで、新たな強さを学んでしまったのです。＞＞

「…………なんて、こと……を。」

＜＜私の可愛い聖女。この知らせを世界に、勇者の保護を、脅威の調査と対処を。＞＞

「お任せください、我らの女神。今から動きます。」

＜＜頼みましたよ。＞＞

おわかりだろうか。神託の女神なんてものをやっているのだ。なんというやらせ、信仰を受けていて、なおこの仕打ち。慈悲がないぞ、デモだ。抗議運動だ。

「ふぅ、これで良し。あーぁ、もうちょっと聖女ちゃんとお話したかったなぁ。はぁ、それもこれも、間抜けな勇者が召喚なんかに引っかかるのが悪い。」

セーラー神は勇者に因縁でもあるのだろうか。やけに勇者を貶している、事あるごとに貶している。直視できないくらいに顔を顰めているほどだ、相当嫌いなんだろう。

「そもそも、なにさ、あの顔。自分が勇者ってだけで主人公ぶって

さ、ボクの主人公は主ちゃん一択なんだよっ。気持ち悪い含み笑いでこっち見んなっての。ニコポのつもりか、殺すぞ猿が。神なめてんじゃねーよっ！なめていいのは、主ちゃんと聖女ちゃんだけだっての！……あぁぁぁっ！！呪っちゃおうかな！！呪っちゃおうかなぁあ！！」

訂正しておこう、嫌悪なんてものではなかった。どうやらセーラー神の琴線にテレフォンパンチを放ったらしい、どうやったらこうなるのだ。勇者よ、勇気と無謀を間違えるな。セーラー神と勇者では、核弾頭と市販のロリポップキャンディー位の差があるぞ。

「あー、くそ。気分悪い、これも勇者のせいだ。勇者だから主人公とか、ねーよ。選ばれしものとか、頭の中身はお花畑かっての、選んでねーよ。罠にかかった猿をおだてただけだろうが。ハーレムとか狙ってんじゃねーよ、下半身が本体とか引くわ。ご都合主義のテンプレがしたいんだったら、他に行け。ここには売ってねーよ、清めの塩でも食らってろ。」

主人公、ハーレムパーティ、ご都合主義、テンプレ。これらは、メタ発言の一部である。そんな説明こそがメタ発言になるのだろうか。否、ならない。そもそも、メタ発言とは読者の視点と作品の視点でやり取りされるものだ。言い換えると、世界の外側の視点と世界の内側の視点。セーラー神は勿論、外側の視点だ。つまり、神の視点と神の視点でのやり取りなのだからメタ発言ではないのだ。セーラー神も作品の内側ではないか、と言う人もいるだろう。だが、その発言こそがメタ発言になってしまうのだ。言語とは難しい。人が扱いきれない道具なだけはある。

「あぁぁぁ、どうしよ。聖女ちゃんはパシリに使っちゃったしな、主ちゃんに慰めてもらおう。しょうがないよね。うん、しょうがな

いよ。これも勇者が悪い。」

「で、私の所まで来た、と。」

「うん。」

ここは、小鳥が増築している迷宮の最奥。机と椅子、九十九しかな

い簡素な場所だった。以前と比べると部屋全体が明るくなっており、ツインベッドが部屋隅に設置してある。それ位しか違いがないが。

「なんだろうな、こう、親近感というか、親しみやすくなっているな。」

「そりゃ、オフの時だってあるさ。ボクは真面目ちゃんじゃないからね。」

「そうか、それと神さまの裏話なんて聞いていいものなのか？」

「転移者と転生者は、多かれ少なかれ裏話を知ってるから大丈夫。」

「そう。」

沈黙。会話が途切れてしまった、いや、自然と静かになったが正しい。小鳥がベッドに横たわっていて、セーラー神に腕枕をしていたからか、どちらも寝入ってしまったのだ。何故そのような状態になったのか、ぜひ問いたい。暫くの間、静寂が続く。

＜＜……勇者。他にも人間の上位種、英雄でしょうか。それに魔王も動く。主はＬｖは最低ですが、ステータスはまあまあ高いですから運が悪くなければ大成するでしょう。称号やスキルは恵まれていますが、それだけ。未だ主は、弱い。ご都合主義が働いていたら、無双することが出来たのでしょう。しかし、そんなものを求めていてはただの人形と同じ。無意味で無価値な何かに成り果ててしまう。それはだめです。ですから、頑張りましょうね、主コトリ。＞＞

九十九が、そんな小さな決意と激励をしてから、更に時間が過ぎていき。少女、小鳥。起床せず。

＜＜…………。＞＞

寝る子は良く育つという。これは、身長が伸びる方向に対して、重力が垂直方向にかかっているからであり、伸びる力に対して縮む力が作用していないからだろう。何故そのような話をするのか。意味がない、と言えば意味はない。探偵アニメで例えるならば、開始20分で日常、事件、解決、独白のサイクルを終えてしまったようなものだ。つまり、これ以上の進展がないようなものなのだ。全てのキャストがただ寝るだけシーンを視聴者が望んでいるだろうか、望まれていても最終回のエンディング後のエピローグ部分位だろう。特に、戦争物であれば映えるだろう。勝利し、平和を迎えたのか。敗北し、死後の世界にいるのか。そのような想像を掻き立てる名シーンになったことだろう。だが、それは今ではない。そもそも彼女は、水城小鳥は、まだ始まってすらいないのだから。ゲームのプレイヤーに立候補しておいて、これ3人用なんだ。お前の席ないから。と御曹司とガキ大将に言われたくはない。彼女は爆睡王ではないのだ、いや爆睡王の個性は秀逸過ぎて代役がいないだけだが。

彼女は、小鳥は主人公というわけではない。自分の人生は自分が主人公だ、なんて綺麗ごとを言ってほしいわけでもない。主人公、物語の主役、世界の中心。そんな重すぎる役が彼女に勤まるのか、否、勤まらない。探せばどこかに主人公はいるのだろう。市井の民かもしれない、貴族の子女かもしれない、王族かもしれない、もしかしたら人ですらないのかもしれない。ただわかっていることは、水城小鳥は、主人公ではない、ということだ。では、彼女は何なのか、と問われれば水城小鳥だ、と答えるだろう。答えになっていないと

捉えるか、これ以外に答えにならないと捉えるかは、各々で判断してほしい。さて、ここでは、水城小鳥は水城小鳥である。が答えになる。では、散々否定し続けた主人公とは何者、いや何物なのだろうか。物語の主役、世界の中心。そんな、回答。はたしてそれは人に勤まるのか、本当の意味での勇者や英雄といった、人類の埒外に生きている連中を〝主人公〟と呼んでいる位なのだ。ただの人には、ただの不変なだけの人には無理だろう。だから、彼女は、水城小鳥は主人公ではないのだ。その資格すら持っていない、いや持っていたら驚きだが。さて、ここまで言えば大体気がつくことだろう。

つまり、水城小鳥にはご都合主義が働いていないのだ。

主人公であれば、何かとお世話になるご都合主義。ピンチになれば新たな力に目覚める、仲間の助けが入る、ふらつけばイベントに遭遇する、逆境に立たされる、意味不明な何かで何故か好意を寄せられる。他にもあるのだが、小鳥には関係ない。運よく関わることがあったとしても、ご都合主義は働かないのだ。良い結果になるとは限らない、前向きに検討させていただきます。というやつだ。ご都合主義さん、お休みなさい。

少女、迷宮からラビットなマーチを始める的な。（前書き）

自然は怖いです。ええ、特に兎なんかが。

少女、迷宮からラビットなマーチを始める的な。

さて、多少時間を跳ばそう。拠点フェイズで生産活動なんて延々と見続けるものじゃない。何が言いたいか。小鳥の迷宮が出来上がりましたよ、というやつだ。広間の入口手前で淡く光り浮かび上がる意味深な魔法陣。立てつけが悪いのか、手を抜いたのか床のタイルはボロボロである。入口にもわかりづらく魔方陣が設置してある。
さあ、始めよう。彼女の迷宮が産声を上げる。小鳥は自身の魔力を使い魔物を召喚する。

魔力コスト＝ＭＰ１０

弾兎×２５
Ｌｖ．５
ＭＰ　３０
ＳＴＲ　２０
ＳＰＤ　８０
ＭＩＮ　３０
ＶＩＴ　３０
スキル
脱兎・弾　脱兎

突き兎×２０
Ｌｖ．５
ＭＰ　３０
ＳＴＲ　３０
ＳＰＤ　６０
ＭＩＮ　３０

ＶＩＴ　５０
スキル
兎に角　脱兎

剣兎×１０
Ｌｖ．５
ＭＰ　３０
ＳＴＲ　５０
ＳＰＤ　４０
ＭＩＮ　３０
ＶＩＴ　６０
スキル
剣兎の争い　剛過剣乱　脱兎

惨月兎×５
Ｌｖ．５
ＭＰ　４０
ＳＴＲ　２０
ＳＰＤ　４０
ＭＩＮ　５０
ＶＩＴ　３０
スキル
狡兎三窟　兎起鶻落　兎の登り坂　兎の囁き　脱兎

月兎×１０
Ｌｖ．５
ＭＰ　１５０
ＳＴＲ　１０
ＳＰＤ　３０
ＭＩＮ　１００

ＶＩＴ　１０
スキル
捨身慈悲　滅私献身　脱兎

偵察兎×１０
Ｌｖ．５
ＭＰ　２０
ＳＴＲ　２０
ＳＰＤ　１００
ＭＩＮ　５０
ＶＩＴ　１００
スキル
兎の円らな瞳　十里耳　兎の囁き　以心伝心　脱兎

伝達兎×１０
Ｌｖ．５
ＭＰ　２０
ＳＴＲ　１０
ＳＰＤ　１５０
ＭＩＮ　２０
ＶＩＴ　５０
スキル
兎の置き手紙　以心伝心　脱兎

総魔力コスト＝ＭＰ９００

部隊設定
指揮・惨月兎　斥候・偵察兎×２　前衛・剣兎×２　中衛・突き兎×４　後衛・弾兎×５　支援・月兎×２　伝令・伝達兎×２

「5部隊設定、召喚。行軍。剣的、いや、見敵必殺。」

＜＜はい、主コトリ。＞＞

兎たちは、外に向けて歩いていく。まるで統率された軍隊のように、迷うことなく進んでいく。うさうさ、うさうさ、ウサウサ、ウサウサ。兎が入口を通る度に魔方陣が起動し、魔法陣から兎が召喚される。

「魔方陣で魔力を吸収し、魔法陣への魔力コストにする、無限兎とはこれいかに。」

＜＜兎だから出来ることですね、兎は低コストが自慢みたいなものですから。それにしても主、初めての魔物を召喚する時は発想が大事ですが、閃きすぎではありませんかね？普通、と言うとおかしな話ですが、スライムやゴブリンなどの、それこそファンタジーの定番を選ぶのでは？＞＞

「ここはファンタジー異世界なのだろう？そんなファンタジーに合わせたら対処されるだろうに。」

＜＜確かに。＞＞

「それに、兎は食用にもされる。人間から見れば獲物だ、それがのこのこ歩いていたら狙うだろう。」

＜＜ですが、それだけでは相手に食糧を与えるだけでは？＞＞

「だから、頭、剣、槍、弾、薬、目、口を部隊でまとめて動かしているだろう？兎が役目を持って組織的に動いてるなんて初見では気付きにくいだろう。」

＜＜なるほど。ファンタジーなのに夢がありませんね。＞＞

「夢見る乙女は卒業したさ。白馬の王子は必要ない。暫くの間は無限兎を続ける。」

さて、兎たちが出ていった場所はのどかな森といっていい場所だ。緑が豊かでそこまで危険な生き物もいない。いたとしても、兎とか、兎とか、兎くらいなものだろう。枝に留まっているガルーダを撃ち殺す兎、草を食んでいるただの兎、もとい、ホーンラビットを斬り殺す兎、そこそこ出会うゴブリンの集団を背後から刺し殺す兎。なるほど、実にのどかだ。兎たちが戯れているのだろう、微笑ましいではないか。和んだやつ、眼科を勧めて差し上げよう、行ってくるがいい。そんな兎が跳梁跋扈している森に少女が二人やってきた。姉妹だろうか、仲良く手をつないで歌を歌っている。何をしに来たのか、薬草でも摘みに来たのだろうか。無駄だろうが、一応言っておこう。少女たちよ、その森は危険だぞ。

「ねぇねぇおねーちゃん、きょうはどこまでいくの？」
「そうだね、この前は森の浅い所で摘んだから、んー…ちょっと奥まで行こうか。」
「なんで？おんなじところでいいじゃん。」
「だめだよ、同じ所で摘んだら薬草が無くなっちゃうんだ。半分く

らい残しておいて別の場所に摘みに行けば、次に来るときはまた増えてるでしょう？」

「ふーん。」

「ふふ、まだわかんないかな。」

彼女の名前は、ラタ。妹の名前は、ユタ。彼女達はこの森に薬草を摘みに来たのだ、いつもなら森に入ってからは慎重に行動するのだが、太陽の日に当てられたのか、妹の様子に微笑ましくなったのか。森の様子が変わっていることに気が付かなかった。

「おねーちゃん、おねーちゃん。」

「なぁに、ユタ。」

「うさぎさんがいるよ、ほら、あそこ。」

ユタが指さす方向に兎はいた。彼女達が気になるのか、ずっと見つめている。ラタが兎を見つめ返していると、兎は居心地が悪いのか森の奥に行ってしまう。

「まって、うさぎさん！」

「あ、ちょっとユタ！あー、もう。奥に行き過ぎちゃ駄目だからね！！」

「わかったー！！」

ユタが兎を追いかけていなくなったため、姉である彼女だけで薬草を摘むことになった。とんだ貧乏くじである。

「まったく、何しにここに来たと思ってるのよ。兎なんて追いかけてないで、薬草を摘みなさいよ、薬草を。」

さて、お気づきだろうか。姉妹は離れてしまい、森の中で孤立してしまったのだ。そう、この森に。森の緑をキャンパスに赤を色付ける、アーティスティックな兎たちがパレードをかましているこの森に。そもそも、人が追いかけられるほど、兎の警戒心はゆるくない。見つからない方が普通だというのに、見つけて追いかける事が出来るなんて野性をなめすぎである。何か裏があるのが定石だろうか。少女と呼べる程にしか生きていない彼女達では、わからなくても普通だが。視点を変えよう、妹はどうしているだろうか。

「………ぁ、ぁぅぁ…………ぁぁ…。」

左腕は捻じ曲がり、右腕や胴体はズタズタに傷つけられて、両足は太腿から斬り飛ばされている。背中にいくつかの弾を受けてうつ伏せで倒れており、涙を流しながら声をあげないように耐えている。手遅れである。誰がこのような惨劇を起こしたのか、問題はそんな事ではない。問題なのは、彼女が今、瀕死の重症、つまり死にかけている事だ。

「……ぃ、ぁぃ………ぃぁぃょ……。」

とうとう耐えられなくなったのか、声をあげてしまう。だが、何故耐えていたのか。簡単なことだ、生きている事が相手に伝わってしまうからだ。そう、兎に。

＜＜…………。＞＞

「…ぁ、ぁぁ…………ぁぁ。」

少女と兎の目が合ってしまう。

―脱兎・弾―

「ぁぁぁぁああ！！」

技の威力が低いのか、背中を撃たれてもまだ死なない。体に激痛が走り、彼女はそれどころではないが。

「ぁぅぅ、ぁ…………ぁぁぁっぁ……。」

＜＜…………。＞＞

「…………………弾兎、引け。ついでに月兎を何匹かここに来させろ。」

少女、眷属を作る的な。（前書き）

倫理や人道に喧嘩を売ります。だってダンジョンマスターだもの。

少女、眷属を作る的な。

<<で、どうするんですか？主。>>

「駒はいくらあっても問題ないだろう？」

名前
ユタ

種族
幼怪兎

称号
兎の贄　香具山兎　転魔　かぐやの眷属　賢兎の端くれ
半人半妖

Lv．0
MP　100
STR　50
SPD　200
MIN　100
VIT　80

スキル
剣脚　兎の寵愛　兎の身代わり　才気煥発　脱兎・韋駄天
成長阻害　人化

「弾兎、引け。ついでに月兎を何匹かここに来させろ。」

「……た……す、け…………て……。」

「知らん、勝手に死ね。」

この場面だけを見ると、小鳥が非情で冷徹な人間に見えるだろう。だが、よく考えてみると別におかしな所は無い。そもそも、彼女はマフィアの首領の孫娘だ。殺し殺されなんて特別でも何でもない。目の前で少女が死のうとも、助けるメリットがなければ助けない。無償の救いなんてありえないのだ、そんな事が出来るのは正義のヒーローだ。誰か呼んでこい、ご都合主義の出番だぞ。それに彼女は見敵必殺を命じたのだ、殺す相手を助ける理由がない。もっと言えば、兎の行軍範囲に入ったのだ、攻撃されてしまうのは仕方がない。餓えた狼の群れ相手に野外コンサートを開くようなものだ、満員御礼、熱烈なラブコールの嵐に違いない。小鳥は少女が未だに生きていることに興味を持っただけで、助けるために出てきたわけではない。彼女は優しい聖女ではないのだ。会いたければ教会に行け、寄付金、もとい、信仰の心次第で出てきてくれるぞ。残念なことに宗教は腐敗しやすいのだ、エイメン。

「……ぃ…こと、き……く、ょ…。」

「そうか、言ったな。その言葉、違えるなよ。」

少女、ユタは限界を超えたのか気絶してしまう。小鳥はそんなユタを見下ろして、鼻を鳴らす。

「…月兎をよんで正解だったな。さて、月兎たちこいつの傷を肩代わりしろ。」

―捨身慈悲―

月兎たちは、ユタの傷を肩代わりするにつれて、１匹また１匹と死んでゆく。どうやら、呼んだ兎だけではすべてを肩代わりすることはできそうにない。ならば、と考えて小鳥は行動に移す。月兎の死体を回収して、ユタを背負い迷宮へと戻っていく。

「九十九。」

＜＜はい、どうかしましたか？＞＞

「人間の子供を、こう、部下にできないか？」

＜＜なるほど、眷属ですね。ではその子供を元に合成獣を作ってはいかがですか？＞＞

「合成、キメラか。そうだな、傷の手当では縛りは緩いか。手順を

教えてくれ。」

＜＜はい、主コトリ。この手順はダンジョンコアを用いることを前提にした方法です。この世界にある既存の方法とは違いますので留意しておいてください。手順は簡単です、眷属にしたいものに魔物の核である、魔石を心臓に埋め込んでください。大体はその時に、拒絶反応で死んでしまいますが、コアを通して再召喚を行うことで眷属化が始まります。眷属化が終われば目覚めるのを待つだけですね。＞＞

「なら、ここに月兎の死体がいくつかある。魔素に分解して１つの魔石にまとめられないか？」

＜＜突飛な発想をしますね、主。結論から言いますと出来ます。ただ兎を使ったとしても魔力コストは低くはありませんので注意を。＞＞

「その作業は九十九に任せる。」

＜＜では、始めます。＞＞

そんな回想をしながらも、ユタが目覚めるのを待つ。あまり時間がかかるのはよろしくないので、そろそろ起こすか迷う小鳥。いや、起こすことに決めたようだ。

「起きろ、私の眷属。」

そういってユタを小突き始める。起きない。

「……。」

そもそも彼女に穏便に起こすという発想はない。ユタは眷属であるという認識がはっきりしているし、言うことを聞くと言ったのだから聞け。と考えている。つまり、俺様理論である。ちなみにラケット装備のスケキングは中学生、らしい。闇の炎に抱かれて眠れとか言いそうである、いつかは黒歴史になることだろう。

「……。」

小鳥は椅子にもたれてユタを見下ろす。幸せそうに眠っている、いい夢でも見ているのだろう。だが、そろそろ現実の時間だ。小鳥はユタの耳元で強く手を叩き合わせる。

「ぅわあ！」

「起きたな、眷属。」

「え？…………あ、うさぎさん。」

「そうだ、その兎さんだ。調子はどうだ、私が誰かわかるか？」

「えっと、だいじょうぶ。おひめさまは、おひめさまってわかるよ。」

「……姫って、いや、ならいい。お前はもう人間じゃない、わたしの指示に拒否権はない。問題は？」

「ないよ。なんだろ、ひとじゃないのに、へんなかんじがしないの。」

「そうか、違和感がないなら手間が省けるな。お前、連れがいただろう？」

「ユタだよ、おねーちゃんはラタ。」

「では、ユタ。森を出たら姉を殺して帰ってこい。」

「うん。わかった。」

兎の少女、ししゃへのたむけなんだって。的な。（前書き）

コーンフレーク。いえ、シリアスな終わりですが、シリアルな語りなので。

ちょうどいいですよね、コーンフレーク。

兎の少女、ししゃへのたむけなんだって。的な。

突然だが、ファンタジー異世界で人が人を手にかける身近な場所、つまり殺人が起きやすい場所、もしくは環境はなんだろうか。大体はファンタジー＝中世ヨーロッパを想像するだろうから、中世ヨーロッパで考えても構わない。山賊や盗賊の類か、身近ではないな。なら職場だろうか、過労死はあるだろうが殺人が起きやすいとは言いにくい。では、どこか。わかりやすいものでいうと、王族や貴族の類、跡継ぎ争いというやつだ。市井の身分では口減らしか。そう、家庭環境こそが殺人が起きやすい。それは何故か、家族という最も身近な他人と、家庭という最も影響される環境で過ごしているのだ。感情の矛先は向けられやすい。全ての家庭が、家族が殺伐としていると言いたいわけではない。幸せな家庭だってあることだろう。ただ、中世の時代は命の価値が軽すぎたのだ。赤ん坊はキャベツ畑から取ってくるもの、ふざけている。ようは、切っ掛けさえあれば家族を殺すことは容易いわけだ。

「ごめんね、おねーちゃん。いたいよね。」

「………ユ、タ…。」

妹が姉を殺す、なんとも悲劇的な出来事である。悲しみで涙が零れそうだ。零すやつは現れていないが、そのうち出てくるだろう。母親とか、父親とか、幼馴染の少年とか。ラタの格好は酷いと言っていい、まるで、賊に押し倒されて汚されてしまった後みたいだ。薬草の入った籠はバラバラにされており、そこらじゅうに散らばっている。服は引き裂かれ、襤褸雑巾になったそれは、もはや肌を隠す事すらできない。瑞々しい体は力が入らないのか弱り果て、背中に傷でもあるのか溢れ出る血が大地を色鮮やかに染め上げている。

「おひめさまにおしえてもらったの、しんじゃうひとにはたくさんのはなをあげるんだって。」

「……ユ、タ………？」

「ししゃへのたむけっていってた、だから、おねーちゃんにもたくさんのはなをあげなきゃね。」

「ユ……タッ……！」

「ばいばい、おねーちゃん。」

―剣脚―

斬。ユタの振り上げた脚が、彼女の、姉の命を斬り捨てる。首を、頚動脈を深く斬った事で血が吹き上がり、姉妹を赤々と彩る。

「はなをあげなきゃね。うさぎさん、もってきて。」

中天から傾き沈み始める太陽の光が、全てを橙色に上塗りする。そこは、その景色は、言い表せない何かを訴えているような。

「あいつら、おせーな。」

独り言を呟くのは、少年。名前はワジ、姉妹と年齢が近いせいか幼馴染の関係にある。

「なんか、嫌な感じがする。」

嫌な感じ。虫の知らせだろうか、大体は思い込みや錯覚で、心配して損したと言って終わるのだが、今回はその感覚が正しい。ただし、手遅れすぎて無駄になっているのだが。残念なことに姉は死に、妹は魔物に堕ちた後だ。少年に救える手立てはない。せいぜい弔ってやることしかできないだろう。

少年ワジは、街の門まで様子を見に行くが、姉妹が帰ってくる様子はない。ワジのなかで嫌な感じが膨れ上がる。

――いや、おかしいことじゃねぇ。俺だって遅れて帰ってくるなんて、いつもの事だし。………でも、あいつらがここまで遅くなるなんてあったか？もう夜になるぞ。……なんだ、なんか気持ちわりーぞ。嫌な感じとか、なんだ、なんなんだ。

―第六感―

――くそっ、わかんねぇ。聞いてみるしかねーな。

そう考えるや否や、急いで門の詰所まで駆けていく。

「なあ、おっちゃん。俺と同じくらいの女の子と、１０才くらいの小さな女の子知らねーか？」

「ワジ、お兄さんな？その二人なら、朝に薬草取りに行ったよ。もうすぐ帰ってくるだろう、なんだ彼女か？」

「なっ、そうじゃねーよ！てか、そんな話じゃねぇ。なんか嫌な感じがすんだよ、あいつらがこんな遅くまで寄り道するなんておかしいんだ。だってもう夜になるんだぞ。」

「心配する気持ちもわかるが、今から出るのはまずい。日が沈みかけてるから門を閉めなきゃいけないからな。」

「なら、ならどーすりゃいいんだよ。帰ってきてねーんだぞ！」

「わかってるよ、ギルドに依頼しといてやる。お前も明日はギルドに行け、その嫌な感じがスキルだったら笑い事にできねぇ。」

翌日の朝。ギルド。

依頼
姉妹の捜索

幼馴染の少年が門番と一緒に姉妹の捜索を依頼してきた。
少年のスキル、第六感により危険度は高いと判断したため、注意されたたし。何かしらの異変である可能性がある。
場所は、東門外、３ｋｍ地点の森近辺である。

依頼料
銀貨５０枚

「いやー、探すだけで銀貨５０枚って美味いよな。」
「金に目が眩んだ？」
「いやいや、空気を和ませようとしてんの。第六感に引っかかるとか、只事じゃねーぜ？」
「今回の依頼は、捜索となっていますが言外に調査もしてこいと言われていますからね。」
「そうね、油断なしで行かないとね。」

依頼内容から不穏な空気を感じ取っているのか、砕けた口調の割に周囲に目を向けている、剣士オート。そんな彼に嫌味を言って笑う、槍士ネフィ。依頼内容を再確認している、魔術士タージュ。タージュに頷く、弓士ミミィ。彼らは平均レベル４０になる中堅クラスの冒険者たちだ。序盤に出てきていい敵じゃない、が彼らには知った

ことじゃない。そもそも問題を起こす方が悪いのだ、三つ目の中華飯坊主を相手に超野菜人をぶつけていくスタイルだ。おいたは許しまへんえ、京美人に叱られたい。

「……ん？なんだありゃ。」

「何かあった？」

「そう、だな。なぁミミィ、あれが何かわかるか？」

「ちょっと待ってね。」

―望遠眼―

「なんて言えばいいのかな、沢山の花が積まれてるんだけど。」

「森の手前で花の山ですか。誰かが近くで花摘みでもしているのでしょうか。」

「いやいや、だからって山積みはねーだろ。」

「どうせわかんないんだから、調べればいいでしょ？」

「………誰が行くよ？」

誰も返事をしない。誰もがわかっているからだ、何かがおかしい。

森の手前で花が山積みになっているだけなのだが、それだけなのがおかしいのだ。動物の声や気配がなく、花の匂いに混ざって鉄の匂いが少しする。

「全員で行きましょう、お互いに死角を潰して。」

「あいよ、皆気ぃつけろよ。」

「……えぇ。」

「…うん。」

1歩また1歩と近づいていく。近づくたびに、鉄の匂いが強くなるが、肉食獣や魔物の姿は確認できず。４人はそれぞれの武器を構え、花の山の前に陣取った。

「山ん中から、血だな。血の匂いがするぞ。」

「ええ何か、いえ、誰かが、いるのでしょう。」

「崩すわ。オート、ミミィ、警戒。」

二人が周囲を警戒するのを確認すると、ネフィは槍で花の山を崩し始める。

「なっ！」

「これは……。」

「…………おい、どうした。おいっ！」

「なに、なんなの！？」

「……周囲の警戒はもういいです。むしろ、森の警戒を。」

「何言ってやが、る。」

「………お姉さん、だよね。」

そこにいたのは、静かに眠る少女、ラタ。体に飛び散った血は綺麗に拭き取られており、花のベッドに寝かされていた。服が無いのか、花弁で肌を隠し花粉で化粧を施されている。一番目を引き付けるのは、深く斬られた首元だ。

「花の墓標、ですか。」

「…のどかな森じゃねぇのかよ。」

「のどかだったんだよ。たぶん、一昨日まで。」

「ねぇ、森の中からも血の匂いがするんだけど。」

「………一旦、戻らねぇか。」

「ですが、ここを放ってはおけませんよ？」

「なら、脚が速いミミィに戻ってもらいましょう？」

「じゃあ、ついでに応援を呼んでくれ。」

「そうですね、僕たちだけでは数が足りないでしょうね。」

「…わかった、すぐに戻るから待ってて。」

冒険者たちの中で弓士が森から離れていく。それを見つめる兎の少女が1人、森の中で静かに笑った。

怪盗男の娘、初期装備は盗むものっすよ。的な。（前書き）

もしかしたら、この子が主人公かも。違うんだけどね。

怪盗男の娘、初期装備は盗むものっすよ。的な。

遡ること、１ヶ月と少し。小鳥が神さま転移を経験するちょっと前。別の神さま、もとい、神様の所でも小鳥と同じような状況になっている少女が、いや少年がいた。サイドテールの頭に黄緑色のベレー帽を深く被り、鋏がはいったワイシャツ姿で赤いネクタイを結んでいる。だが、指先まで袖で隠し、鎖骨あたりまではだけている。黒のキュロットスカートにベルトを適当に通して、踵の高いビーチサンダルを履いており、全体的にだらけている雰囲気を纏っている。意外と楽な恰好なのだろう、自然体である。

「さて、状況は理解したね？」

神様と表現できる誰かに説明されて、ある者は怒り、またある者は喜び、と様々な反応を示す中、少年は、中里司は静かに周りの様子を見ていた。

「…………。」

「うんうん、結構。じゃあ、準備がいい子からあっちへ行ってもらおうか。」

そう言って、次々と転移させていく。また、暫くの間落ち着けなかった人たちも、徐々にいなくなってゆく。

「さあ、君が最後だ。」

「そっすね。異世界なんて夢みたいっすけど、そのまま行くのは勘弁してほしいっす。」

「ほう、つまり何かしらして欲しいと？」

「そそ、神様にいうとおかしいかもしれないっすけど、怪盗稼業をやってみたいんすよ。」

「怪盗か、ふむ、いいだろう。」

「お、言ってみるものっすね。」

「ああ、神は、と言うより、私はそこそこ暇なのでね。だから暇つぶしに介入しただけだ。面白ければなんだっていい。」

「身も蓋もないっす。」

「神とはそんなものだ。さて、行くがいい。ああ、鑑定と念じろよ。ステータスじゃあないからな。」

「は？」

そんな言葉を最後に司は異世界デビューしてしまう。周りを見渡すと、圧倒される程の大自然が広がっており、地平線に街壁らしきものが見える。目線を下げると５人ほど倒れており、学生服を着ているところを見るにファンタジー異世界にやってきた学生だろう。ご同輩か、しかもご丁寧に高く売れそうな装備を持っている。

「うわ、チート武器ってやつっすか？……ふむ、まずは、自分の確認っすよね。鑑定とか言ってたっすね。」

―鑑定―

名前　司　中里

種族　人間

称号　怪盗　奇術師　詐欺師　道化師

Lv．20

MP　1000

STR　120

SPD　700

MIN　300

VIT　100

スキル

鑑定　中に人はいないっす　怪盗参上っすよ　嘘から出来た

実っす　君は段々眠くなるっす

「意味がわからないっす。スキルの名前で馬鹿にされてるっすよ。」

ここで、少し説明するならば、スキル名は個人の無意識で変わることがある。かなり珍しいことなのだが、欲望駄々漏れのスキル名だったり、略称しすぎて自分しかわからなかったり、異口同音の名前だったり、彼女、いや彼のようにスキル名に語尾が付くことだってある。再度説明するが珍しいことなのだ、異世界にいることから珍

しいとか言ってはいけない。

「ま、いいっす。今はご同輩に何か恵んで貰うっすよ。装備品と貨幣っすかね？　それ位しか……お、携帯端末ゲットっす。」

それにしても、彼女、いや彼は外道ではなかろうか。寝ている同輩から持ち物と金を拝借しているのだ。怪盗だからって盗賊の真似事は如何なものか、賛否両論である。そもそも初期装備を盗むとは彼女に、いや彼に慈悲はないのだろうか。怪盗、拝借する前に着替えてほしいものだ、性別を間違えてしまう。

「んー、装備品、お金、端末、あと、異次元ポケットの学ランだけっすか。しょぼいっすね。」

—鑑定—

絶槍・雷光
使用者の魔力を消費するたびに動作が加速される。

聖剣・デュランダル
異世界の聖剣。不壊の逸話から、決して壊れない。

聖なる逆十字の短剣・セントクロス
十字に切りつけた相手に祝福と呪いを与える。
相手は６日間どんな傷でも回復するが、７日目に過去に負った傷の全てを再現し治らなくなる。

詠唱回路・転詩の輪

指輪、腕輪、足輪、もしくは天使の輪。
どこに着けても問題ない。魔力を流すことで、記録してある魔法陣が使える。

魔弓・クィーン
相手を思い浮かべて弦を鳴らす。
ＭＰの最大値が相手より高い場合、急所に貫通した矢が生える。低い場合、使用者に１日、矢の雨が降る。

携帯端末
異世界の端末。思春期男子の思い出が詰まっている。桃源郷な動画と画像が沢山。

学ラン・ディメンジョン
ポケットの中は無限大。そんな純粋な夢から生まれた。ポケット以外にも、学ランの内側からでも出し入れ可能。
肩にかけても何故か落ちない。

お金の詰まった袋
金貨５００枚の入った袋。単位はセル。鉄貨、銅貨、銀貨、白金貨、金貨、１０進法で貨幣が変わる。鉄貨１枚１セル。

「まあまあの収穫じゃないっすかね？　いやはや、ご同輩に感謝っすね。」

―中に人はいないっす―

武器の類を収納すると、学ランを肩にかけ、端末とお金を学ランに

しまい、足取り軽くその場を離れていく。目指すは街壁、街の中。

怪盗男の娘、街、騒音、迷子にてっす。的な。（前書き）

奴隷を買いますか？ここにはそんなコマンドはありません。怪盗ですもの。

怪盗男の娘、街、騒音、迷子にてっす。的な。

さく、さく、さく、さく。軽やかな足音とともに揺れるサイドテールは心なしか、萎れているように見える。彼女も、いや彼も浮かない顔をしている。端末を見る目が死にかけているのだ、一体何があったのか。

＜＜………！…………！＞＞

「……うゎぁぁ、なんて言うか、エロいっす、激しすぎるっす。消去一択っすね。初期化してやるっす。」

桃源郷な動画を見ていたようだ、興味本位というやつか。しかし、些か刺激が強すぎたようだ。手早く端末の初期化を終わらせている。ふと顔を上げてみると街壁が視界いっぱいに広がり、門番らしき恰好をした人物が２人、門の傍に立っている。

「そこの怪しい恰好をした娘、一旦止まれ。」

「……ん、ウチっすか？何用で？」

「そうだ、この街に何をしに来た。」

―嘘から出来た実っす―

「何をしに来たのかっすか？簡単っすよ、”出稼ぎをしに来たっす”。」

「…出稼ぎ？田舎から来たのか。」

「……あー、そっすね。田舎であってるっすよ。」

「そうか、なら入料税を知っているか？もしくは身分を証明出来るものは？」

「ん、村のお金を貰ってるっす、身分証はないっすね。」

「そうか、なら詰所まで一緒に来てくれ。税と一緒に身分証を発行しよう。」

「お、ありがたいっす。」

——身分証の発行っすか。意外と文明が発達した世界ってことっすか？いや、街壁や門番が鎧を着ているところを見るに、そこまで高度な文明とは言い難いっす。むしろ、街壁がレンガブロックじゃないから一部分だけが突出している感じがするっすかね？んー、魔法とか？でも、そこまで万能でもない感じなんすよね。それに魔法って武器の印象が強すぎるんすよ、魔法を技術転用する考えがないと武器のままっす。いや、魔法以外にもあるんじゃないっすかね？例えば、錬金術とか。確か、転詩の輪が詠唱回路ってものだったっすね。チート武器とは言わないっすけど、近いものは作っていそうっす。なら、一枚の街壁もいけそうっすね。とすると魔法技術が発展している中世の文明っすか？社会構造とかどうなっているんすかね、魔法を抜いたらただの中世ヨーロッパっぽいっすけど、そうだったら王政、帝政による貴族とかいそうっす。領主もやってそうっすね。

ああ、ファンタジーな世界だったっすね、なら冒険者ギルドとかないっすかね？ 調べてみたいっす。

「ここだ、ちょっと待ってろ。」

「はいっす。」

門番が部屋の奥に言っている間に部屋の壁や調度品に目を向けてみるが、木で簡易に組み立てたような棚に簡素な机と椅子、そこらの石材で出来た壁。司が元いた世界の文明に比べると時代が古く感じてしまう。

――んー、やっぱりそこまで文明は発展してなさそうっす。いや、魔法技術が便利すぎて文明の発展が阻害されているっすか？ そうか、ウチらの世界の魔法なんて御伽噺だったっすね。全て人の手で作ってきたっすから技術発展、高度文明化は当たり前っす。こっちの世界は文明の発展が必要ないから、そのままなんすね。ちょっとスッキリしたっす。

「さて、この黒い板が身分証になる。こいつは、魔力を流すと白くなるんだが、１人１枚で対応している。２枚目は反応しない。なくしたら詰所に来い、金はかかるが再発行が出来る。」

「2枚目は反応しないんじゃないんすか？」

「ああ、だから1枚目を壊して再発行だ。でだ、これを持っていれば入料税はない。あとは冒険者ギルドとかの登録にも使えるな。魔力を流してみろ。」

「ん、白くなったっす。」

「よし、ああ、賞金首になると白じゃなくて赤くなるからな。」

「うっす。」

「じゃ、最後だ。入料税は銀貨1枚だ。」

「金貨1枚しかないっすね。」

「問題ない、銀貨に変えてやる。……さて、これで終わりだ。ようこそアザンの街へってな。」

詰所を通って入った街は不衛生というわけではなく、むしろ衛生的で人通りは多かった。そんな通りを歩き街並みを眺めていると、人ごみに混ざって目立たないが身なりに差があることがわかる。主に首輪を付けている人と、細い裏道にいる人は全体的に薄汚れている。どうやら、面倒事はどこに行ってもあるようである。

「さてさて、どうするっすか、まずは宿っすかね？」

あたりを見渡すが宿屋らしきものがわからない。そもそも、司はこの街に詳しくはない。旅行に行ったことがあればわかりやすいだろう、調べておらず、さらに見知らぬ土地とは方向音痴の天敵なのだ。方向音痴でなくとも迷うだろう。だからなのか、司は迷った。

「だめっすね。案内人がほしいっす。ファンタジーだったら奴隷とか買うところっすか？」

携帯端末の動画を見た後だからか、少々ネガティブな思考になっているようだ。誰かに案内してもらうという発想はないのか、それと

も無意識で奴隷がほしいとでも思っているのか。彼女の、いや彼の頭の中ではファンタジーが手を振って凱旋しているようだ。

「いやいやいやいや、誰かに教えてもらえばいいじゃないっすか。奴隷とかちょっと欲しいっすけど、今はいらないっす。」

ブレイク煩悩。どうやら、聞けばいいことに気付いたようだ。だが、いつかは買うようだ。未練でもあるのか。

「あ、お兄さん。ちょっと宿屋を教えてほしいっす。」

怪盗男の娘、野郎が美女っすか……。的な。（前書き）

すり、当たり屋、よくあることさ。

怪盗男の娘、野郎が美女っすか……。的な。

一人称視点の小説を読んだことがあるだろうか。著者と読者にもよるが当たりと外れがある、日記形式、心情形式、何故か毎回読者に挨拶してくる形式、ｓｉｄｅつまり視点変更形式、擬似読者視点形式。多々あるが一人称視点といっても大きな違いがあるもの、逆に言えば同じジャンルでも書き方に違いが出てくる。何故このような雑学の披露じみたことをしているのか。

本題に入る前の、ちょっとした導入部分。メインディッシュはこれからだ、とハードルを飛び越えられない高さにしているのだ。

「なあぁぁぁぁ！！なんっなんすか、この本はぁぁ！！一人称視点だから理解しやすぃ？んな書き方じゃねーっすよ！！どうも〇〇とか、あっ〇〇とか、ちなみに〇〇とか、一人称で使うなら違和感なくやってほしいっすね！！そもそも口語体は会話とか思考で使うから違和感ないんすよ、文語体じゃないんすよっ、地の文に謝れ！！」

司は読んでいた本を床に叩き付けるや体重をかけて踏み始めた。

どうも、他人称視点です。あっ、今は宿の食堂にいるんだよ。ちなみに、本はここに来る前に買ったんだよね～。

つまり、そういうことである。世の物書きとは尊敬に値するということだ。だからこそライトノベルとジャンル分けしているのだが。読み易すぎて、逆に読み辛いというのも苦労する。三人称視点を書けと言われても難しいもの、ならば他人称視点とラベルを貼れば問題ない、盲点突くこと網目通しの如く。嘘ではない、捉え方が違うだけなのだ。さて、話を変えよう。司は食堂にいる、個室ではな

い。なので当然、騒げば注目されるのだが、本に夢中のようだ。読書ではないのが残念で仕方ならない、周りからの視線も残念で仕方ならない。

「おらっす、くらえっす、これでもかっす！！」

人間、感情に任せて行動すると、なかなか周りが目に入らないものだ。現に司は未だに本を踏んでいる。本の虫たちには噴飯ものだぞ、物を大事に、合言葉はＭＯＴＴＡＩＮＡＩだ。

「ふーっ、ふーっ、ふぅぅ。…………ん？」

興奮して赤かった顔は、朱が入ったような、羞恥に苛まれる顔をして机に伏せた。自分の奇行を見られたのだ、人生の汚点だろう。司は顔を俯けて立ち上がり、食堂を出て部屋へと戻っていく。扉を後ろ手で閉め鍵をかけると、鑑定を使い部屋の隅々まで調べていく。

「ん、怪しい仕掛けはないっすね。食堂で騒いでみたっすけど、残念な目で見られるだけでこっちを窺うような視線はなかったっすね。ステータスを見てもはずればっかっす。やっぱりスラムとか遊郭に行ってみるっすか。」

彼女が、いや彼が何を思ってスラム街や遊郭街に行こうとしているのか。理由は怪盗だからだ、と言えてしまう。隠れ家を探しているのだ、怪盗は怪しいところに隠れるもの、木の葉を隠すには森が丁度いい。だが、馬鹿正直に隠れ家を使うわけじゃない。囮、身代わりとして使うのだ。つまり、灯台下暗しを狙っているのである。

遊郭街。それは花町とも呼ばれる場所、華やかな服を身に纏う女性

が道行く男性を誘い、一夜の思い出を提供する場所、もしくはその逆、あるいは同性同士。遊郭の通りを歩いていると客を誘う声があちらこちらから聞こえてくる。まるで誘蛾灯のように誘われてしまう客を見ていると貞操観念が緩そうである。少なくとも遊郭に来るような連中はそうだろう。その様なことを考えていたからか、すれ違う男に体をぶつけられてしまう。前方不注意だ。

「おう、嬢ちゃん。ぶつかっといて無視するたぁ、どういうことだ、えぇ！？」

ぶつかった男が何やら喚き散らし、金を寄越せと叫んでいるが、司は聞いてはいなかった。この男はこの街の裏側の人間か否かを考えていたからだ。鑑定を使っても目を引くようなものはなし、程度の低いお粗末な恐喝で頭が悪そう、怒鳴る、喚く、叫ぶだけで面白味もない。まるで使い古されたテンプレのような展開である、だがテンプレではない、よくあることなだけだ。周りの野次馬は見ているだけで助けようともしない、いや助けないのは当然ともいえる。遊郭などの夜の街では自分の力で片づけなければならない、助けようとして飛び火でもされたら迷惑だからだ。暗黙の了解というやつである。

「聞いてんのか、クソガキ！金が払えねぇなら、その体で払ってもらおうか！じゃなけりゃ、死にさらせ！」

司の腕を掴もうとして伸ばされた手は、掴む前に降ろされることになった。

「死ねって言ったっすね。残念っすよ、ならそっちはずっと寝ててくださいっす。」

司が手首を振るうと竪琴を弾くような音が響きわたり、怒鳴ってい
た男は糸が切れた様に倒れ伏してしまった。

「転詩の輪、起動。眠れる森の美女。王子様に助けてもらうっすよ、
なんてね。……さて、行くっすか。」

魔法陣・眠れる森の美女(スリーピングビューティー)
睡眠の呪いを相手にかける。かけられた相手は1つの方法のみで解
呪出来る。
王子の身分を持つものに、目覚めの口づけをされること。

花の少女、森の美術館を始めます。的な。（前書き）

少ない、プロローグな扱い。ルーブル美術館っていいよね。

花の少女、森の美術館を始めます。的な。

姫様はいいました。

あなたは、生まれ変わった。これからは、わたしと一緒って。

だから、姫様と生きていくことにしました。これまではお父さん、お母さん、妹、おじさん、おばさんなど。いろんな人と街で暮らしていたけど、今からは、姫様の側で暮らすことになります。森には、たくさんの兎がいて、みんな芸術家なんだとか。赤の絵の具で絵画を描いて、いろんなもので作品を作って、お客さまに披露します。だから私も、皆の真似をして作品を作ることにしました。

「ようこそおいでくださいました、森の美術館へ。皆様を素敵な芸術品にして差し上げます。」

私の手は、真っ赤な絵の具で染まっていました。

走る。走る。走る。急げ、急げ、急げ、弓士ミミィは焦る気持ちを抑えきれずに、限界まで速く走る。東門前まで、門番が止めるまで、走ることしか考えていなかった。落ち着きを取り戻せず、ギルドまで駆けていき受付でようやく止まった。

「お願い、今すぐ増援を頂戴。急いで。」

「あぁ、冒険者の増援ね。こちらは変わらない。」

＜＜じゃあ、うさぎさんたちだけでいいの？＞＞

「十分だろう、こっちまで来るなら私が相手だ。…そうだな、ユタ帰ってこい。」

＜＜わかった。すぐもどるね、おひめさま。＞＞

――さて、冒険者がまたやってくる。迷宮の発展（しょくじ）に貢献してくれ。お前たちを出迎えるのは探していた少女の成れの果てだ。

「さて、代わりに出迎えをしてくれ。頼んだよ、ラタ。」

森の手前３００ｍ地点、そこには３７人もの冒険者がいたが誰もが沈黙していた。原因は１つのオブジェ、いやここでは作品というのが正しいのだろう。槍を軸に杖で支え、原型がわからない程に潰された肉塊と金属で作った十字架の両端に手首を貫き通し、首を斬り落として心臓に剣を突き立てる。槍の穂先には首が添えられ、頬には血で作品名が書かれている。

『姫へ捧げる・磔の肉十字』

それは槍士ネフィと肉塊にされた剣士オート、魔術師タージュの最後。死んだ後に、死体を弄ばれて、材料にされて出来上がった芸術品。

「…………っ！…………っ！」

ミミィは、声を殺して泣いていた。零れる涙は拭き取らず、仲間だったものを見続けている。そうしているうちに心の整理がついたのか、

「討つ。」

一言。その一言が全てだった。悲哀を喪失を、怒りと殺意で塗り固めて森へ進む。誰も止めず、むしろ賛同するように各々武器を構えて森へ入ってゆく。

「……ようこそ、森の美術館へ。あなた方には、お楽しみいただけるでしょう。……ごゆっくり。」

振り返る、そこには誰もいない。冒険者達は森の奥へ、展覧会に参加する。

少女、最近の兎は演説するのか？的な。（前書き）

大佐、または１１の本国皇帝は演説が凄いよね。それっぽくしたけど稚拙すぎた。

追記、兎の扱いと戦時演説が人を選ぶと言われました。気を付けるようにします。時事問題というやつですかね？

少女、最近の兎は演説するのか？的な。

森を駆け抜ける、蠢いている何かから逃げるために。やつらは茶色の体毛で、その愛くるしいとも表現出来る目をこちらに向けて走ってくる。逃げろ、捕まれば終わりだ。後ろからやつらが追ってくる。後ろばかりに気を向けるな、前を向かねば死にゆくぞ。

―脱兎・弾―

「ぐぅ……がぁ…！！」

狙撃。それは僅かなずれがあれど、冒険者の眼球と脳髄を撃ち抜いた。

＜＜………………！！＞＞

兎たちは、死体を囲って勝鬨をあげる。まるで、魔王を倒した後の人類のようだ。いや、兎たちからしたら冒険者は魔王と変わらないのかもしれない。ならば勇者兎の活躍を期待せねばなるまい。

兎の中から１匹が飛び出して、死体の上に乗りあがった。

＜＜…………！＞＞

諸君、我々はまた新たな偉業を成し遂げた。弱者である我々が、強者である人間を屠ったのだ。この事実が何を意味するのか、諸君らに理解できるだろうか、できるはずだ。そう、下克上(ジャイアントキリング)だ。我々兎は群れることしかできない存在ではない、ただただ襲われ、屠られ、食い潰されるだけの存在ではない。今の世界を生きる強者どもは、兎をただの餌として見下している。悲しいことにそれは事実だ、変りはしない現実だ。だが餌としてのうのうと生きていたわけではない。諸君、ここで問いかけよう。我々兎はただの餌だったのだろうか、肉が詰まっただけの血袋なのだろうか。否っ！！そうではない、そうではないだろう。我々の過去を振り返ってみるがいい、この森に進出し、我々の脅威になっていたやつらを、我々はどうした。そう、全て倒してきた。撃ち倒し、刺し殺し、斬り捨て、嵌め落とした。我々兎は脅威のその全てを引き摺り下ろし淘汰してきたのだ。

と、言っているように聞こえる。

＜＜…………！＞＞

では我々は強者か。いや。純然たる弱者だ、弱者である。ただ群れていただけではない兎にすぎない、徒党(むれて)を組み、組織(むれて)を組み、編隊(むれた)を組んだだけの小さな兎なのだ。だがそんなものは強者とて行っていることだ。やつらから見れば、我々など取るに足らないちっぽけな存在なのだろう。その爪で引き裂き、その牙で噛み千切り、その足で踏み潰し、その手で握り潰し、何気ない気まぐれで蹂躙しつくして終わるのだ。我々はそれ位に、弱い。生存競争、兎は最後まで勝ち残れるだけの力はない。弱肉強食、兎は往々にして食われる側だ。自然の摂理、兎にとって苦しいものが多い。それでも我々は生きている。生き残っているのだ。

と、言っているように聞こえる。

＜＜…………！＞＞

生き残っている我々は、未だ馬鹿みたいに草を食み、畜生のように血肉をくれてやるだけで、上を、強者を、上位者たちを引き摺り下ろそうという気概がない。だがそれも仕方がないのかもしれない。兎では、手が届く範囲などたかが知れている。それを理解しているからなのか、兎も、強者たちも、その獲物と狩人（じゃくにくきょうしょく）の関係を変えようとは、変わることはなかった。だが、それももう過去のことだ。何故なら、我々が生まれたからだ。弱者である我々が強者を屠る気概を持って生まれたからだ。ならば、そのようにしよう。強者を引き裂く爪を、噛み千切る牙を、踏み潰す足を、握りつぶす手を。蹂躙されることを教えてやろう。我々は兎だ、上を見上げ、強者に歯向かい、上位者たちを叩き落とす、ただの兎だ。

と言っているように聞こえる。

＜＜…………！＞＞

さあ、行くぞ。やつらに我々を知ってもらおう、やつらを屠る弱い兎がいることを、生まれたことを知ってもらおう！！我々はひたすらに弱い、だからこそ屠れるのだ！！さあ、行くぞ。歩を進めるぞ！！

さくっ。

軽く草を踏む音がした。兎だから仕方がないが軍靴の鳴り響く音くらいが丁度いいのではないだろうか。

少女、戦闘とは実力が近しいからなりたつのだ。的な。（前書き）

戦闘描写が書けない言い訳にも使えますね。

少女、戦闘とは実力が近しいからなりたつのだ。的な。

よくある子供向けの物語と聞いて、思い浮かべるものは何だろうか。これは不思議と年代によって物語のテーマが違ってくる。時代の変化が原因か社会の常識の変化が理由なのか、専門家ではないので原因は追及しないが、その物語のテーマとして今でもそこそこ出てくる一つに勧善懲悪といったものがある。噛み砕いて説明するならば仮面バッタと黒タイツの関係だろう。バッタキックで一掃されて今日も平和は保たれた、というやつである。そう、正義のヒーローが悪のボスを倒してしまうのだ、名場面も多いことだろう。

「ふむ、あえて言うならば。よくぞここまでたどり着いたな、勇者よ。」

「…………。」

「……ふぅ、お約束というものは、現実では以外と使われないものだな。」

名場面も多いことだろう、魔王が出迎え勇者が答える。だが、実際にそんな事をするくらいなら出合い頭に必殺技でもかければいい、問答は無用なのだ。今の場面でも同じ事が行われている、仁王立ちの少女に向けて矢や魔法が飛ばされているが、しかし、何一つとして掠りもしなければ当たりもしない。近接戦を仕掛けた者は、手刀による居合拳もとい居合剣で首を斬り捨てられている。つまり、残っているのは後衛職や支援職の連中だ。学習したのだろう、攻撃は止んだが警戒を緩めることはない。

「ふむ、準備運動の終わりと見ていいのかな？」

「なんなの。」

「…………ん？」

「あなたは、一体なんなの。」

「私か。私は――――。」

問いかける女性、答える少女。そこにはごまかしや嘘、何の小細工すらもない、彼女は聞かれたから答えただけだ。それは堂々とした立ち姿で、迷いが見えない。少女は嘘を言っていない、確信できる、できてしまう。だからこそ、自分の耳を疑ってしまう。聞き間違えたか、そうではない。理解できなかったか、それでもない。信じられなかったか、そんなことはない。ただ、聞き慣れない言葉を聞いて、それが事実だと確信して、それでも嘘だと言ってほしいから耳を疑う。

「私は、ただの迷宮の主（ダンジョンマスター）だよ。珍しくもないね。」

ああ、迷宮。昔話で御伽噺だった存在、絶滅したはずの廃墟、淘汰されたはずの楽園。ああ、迷宮。それは誘蛾灯のように人を惑わせ食い物にする空腹の怪物。富を、名声を、人が望みうる夢を叶えてしまえる愚者の宝物殿。無くなったはずなのに、何故、そこにある

のか。迷宮の主がなんで目の前にいるのか。

「何故っていう顔をしているね、簡単なことだ。そう、答えは簡単だ。迷宮がなかった時代は終わったんだ、これからは迷宮があるのが当たり前になる。難しい言い方をするなら時代の転換期、まあ、そこまで気にするものでもないだろう。君たちが最も”気を付けなければいけない”ことは――――私の話を聞いていることだと思うよ？」

――危剣物――

――大気剣――

――言刃――

「”届いていないかい？”……君たちに”言刃を贈ろ（アドバイスをしよ）う”。相手の刃無（コメント）しに夢中になってはいけないよ、バラバラになってしまう。」

「あぐぅっ！？」

血煙が広がる、湿り気を帯びてピチャピチャと音を立てた姿は凄惨さと残酷さを印象付け、体中を染め上げるように滴り流れる血は、そんな血の海の中で淫靡さを醸し出している。しかし、少女に関心はなく。さようなら、お大事に。そんな言葉すら刃物に変えて少女は冒険者を斬り捨てる。彼女はその惨状に目もくれず迷宮に帰っていってしまう。立ち去った場所に残ったものは死体か肉塊か、それとも運よく斬り刻まれただけか。

「……ぅぐ………あぁ……。」

「がぁ……うぅ……。」

うめき声が聞こえる。生き残った冒険者もいたようだが、その姿は酷いと言える。全身の表皮は斬り刻まれて、手足の腱は使い物にならない位傷めつけられている。さらに酷いものは足を斬り飛ばされている、誰一人として重症ではない者がいない。

「ダンジョン……マスター……私がぁ……わた、しが…。」

冒険者たちの、いや冒険者ミミィの復讐は復讐にならず、徒に味方の命を散らせただけでなく自分自身も全身に傷を負った。元凶の少女とは戦闘にすらならず頭の理解が追いつく前に敗北した。

全滅。救援が用意されるまで未だ暫く。その森は迷宮と認識されアンナの光迷宮(ダンジョン・レッドキャンパス)と呼ばれるようになる。

少女、Q、ファンタジーに対抗。A、醜い政治と圧倒的科学力。的な。（前書き

大体は偏見が混ざっています。真に受けないようお願いします。

Q、生物の学術研究関連は知恵熱が出る、とこの身が言っています。

少女、Q、ファンタジーに対抗。A、醜い政治と圧倒的科学力。的な。

「アンナの光迷宮、か。」

＜＜それがどうかなされましたか、主。＞＞

「ああ、この迷宮の名前だよ。アンナの光だ、それは私たちの世界に残る名前でね。使われた名前は絵画の名前、発表された当時あまりの斬新さに見る者全てに強烈な印象を残した作品の名前さ。そう、レッドキャンパス。一面に鮮やかな赤を彩ったのさ、なるほど遠回しに、嫌味（ぶちまけたことを）ったらしく皮肉（いっている）ってくれたようだ。」

＜＜つまり、主と同じあちらの人がこの迷宮の存在を知ったと。＞＞

「当然だろう、ましてや迷宮なんて代物はこちら側にしてみれば、御伽噺になるまで古ぼけた存在なんだ。そんな過去の遺物が復活しました、なんて事実が広まらないはずがない。言うなれば宣伝みたいなものだよ。斬った相手が知っている情報を好き勝手に覗けるのは便利だな、あちらの世界の名前を使うやつがいるなんてこともわかってしまうからな。転移か転生かは知らないが冒険者ギルドに、もしくは領主関係か宮廷とかにいるんだろう。迷宮の名前を決めるなんて、現場には決めさせてもらえないからな。」

＜＜なるほど、情報分析から得たんですね。＞＞

「そうだな。……まあ、引きこもってばかりでは気が滅入る、私たちもアザンの街とやらに行くとしようか。」

そうつぶやくと、迷宮の魔物召喚を操作し始める。彼女が召喚する

魔物は何か、そもそも街に行くのに何故呼ぶ必要があるのか。

＜＜主コトリ。何故、魔物を召喚するのですか？＞＞

「そうだな、さっき気付いたことなんだ。九十九はダンジョンの……陣地とでも言おうか、それを広げる方法を知っているか？」

＜＜はい、土地に対して迷宮の魔力を注ぎ続けて染色する方法です。＞＞

「そう、ならそれが記録されている正規手順なんだろうね。ウサギ達なんだけど、森に進出させてからそこそこ死んだだろう？それから森がダンジョンの影響下に入ったみたいなんだ、どうやら、ある程度の数がいて、そこそこの数が死ねば影響下に入るらしい。生贄、サクリファイスなのだろうね。ダンジョンとは迷宮を意味しているようだが影響下にあれば、そこもダンジョンとして認識するらしい。つまりは裏技というやつだね。」

ところで、魔物とは何か。それは、生物であるという者がいれば、生物とは違うものだという者もいる。これは魔物を別々の個体で考えているからだ。ホーンラビットやゴブリンなどは魔石を持っているだけで、普通に生物のカテゴリーに入れてしまう。だが同じ魔物でもスケルトンやゴーレムは生物とは言えない。明らかに無機物の何かである。いや、ひねくれた考え方をするならば機械生命体を生物と無理矢理に捉えるなら、ゴーレムとかだって生物だと、無理なこじ付けが出来てしまうが、いや無理だ。ようは魔石がある某ならば魔物なのだ。生物、非生物はあまり関係してこないのかもしれない。

ならば何故、生物の話をしたのか。それは普通のウサギが魔物だか

らだ、正しくは"魔石を持っている"普通のウサギなのだ。このファンタジーな世界にも、もちろん普通の動物はいる、ウサギ然り、ブタ、ウマ、トリ、クマ、アジとかサバとか――水生生物は魚ぐらいしかまともなものはいないが――だっている。魔物だからといって普通の動物を相手に何でも無双するわけではない、むしろゴブリンなんかはクマやトラに無双されている始末である。と、優しい表現をしてみたもののファンタジーに適応している動物たちは、容赦無用にスキルなんかを使ってくる。魔物じゃなければ何なんだと言いたくなるような暴れっぷりなのだ。少しだけ話を戻そう、そう、ウサギが魔石を持っていたところだ。つまりは魔石さえあれば魔物だと決めている。だから、普通のウサギだと先入観で決めてしまうと逆にやられてしまう。

ダンジョンでは召喚した――厳密には召喚ではなく生成だろうが――魔物に対しては命令権がある、その命令権を使って魔物をアザンの街まで送ろうとしているのだ。そうすることでダンジョンの影響範囲を街まで広げようとしている。

<<しかし主コトリ。魔物を街まで行かせても冒険者や兵士に討たれてしまうだけでは？>>

「なら、討たせなければいいだけの話だろう？九十九、馬鹿正直に魔物を召喚するわけないだろう、相手に見えない魔物を召喚するだけのことだ。」

<<透明の魔物ですか、ですがコスト的には賛同できません。>>

「いや違うよ、どうやら九十九はまだ頭が固いようだな。見せないんじゃない見えない魔物、つまり細菌を使う。」

＜＜なるほど、物理的に見えない、というわけですか。またファンタジーにおけるテンプレートを無視した発想ですね。＞＞

「ファンタジーに合わせてどうする、ゴブリンなどで殴りに行っても数ですら負けて蹴散らされるなんて、私は御免だ。まあ、ゴブリンはどこか違うところがやればいい、私はマイコプラズマを元にして召喚する。」

＜＜はい主コトリ、召喚します。＞＞

名前
サイコプラズマ

種族
真正細菌

称号
世界最小の生物　魔の微生物　マイクロウェポン　かぐやの眷属

Ｌｖ．１
ＭＰ　０
ＳＴＲ　０
ＳＰＤ　０
ＭＩＮ　０
ＶＩＴ　０

スキル
細胞寄生　自身複製　エナジードレイン　脱出　マイクロ

スパイ

＜＜ファンタジーではあり得ませんね。さすがです、主コトリ。＞＞

「おいおい、私を社会に馴染めない社会不適合者みたいに呼ぶのはやめてくれ。これでもちゃんとファンタジー・ファンタシーしているだろう？世界最小の生物マイコプラズマをモデルにした世界最小の魔物サイコプラズマだ。いちいち足を使って情報を集めるなんて馬鹿らしい、スパイとは諜報とは何のためにあるのかを体現しているコイツを使った方がよっぽどマシだろう。それに影響下に入れるためには数が必要だ、大きさが関係しないところがまた、実にいい。」

＜＜そして、劣化しているとはいえ、眷属化による不変さですか。＞＞

数は力である、これは人の歴史ではそこそこ出てくる事実であり結果である。いくら無双できる一騎当千の何かだとしても、個人の強さは数の強さに対しては絶対的ではない。極端な話をするなら呂布にアジ＝ダカーハを討ち取れというようなものだ、無双するたびに数が増える敵など倒せるようなものではないのだ。そもそも、アジ＝ダカーハは倒すものではない、概念故に学ぶものだ。倒せるとしたら人類を救っちゃう系の人外人間か、何でもかんでも詰め込んだ系の”ぼくがかんがえたさいきょうの”か、概念攻撃だろＪＫ系の小学生か中学生から発症する不治の病くらいだろう。いや、発想の問題か、想像力なのかもしれない。話を戻そう、まず細菌とは人の目には物理的に見えない。見えた方には冗談抜きで眼科をお勧めする、それは眼球の表面か水晶体のご病気です。顕微鏡を使ってよう

やく見える位の大きさが細菌のデフォルトサイズなのだ、その中でも、顕微鏡を使っても見えた気がする程度の目視の出来なささが売りの小さな細菌が、マイコプラズマと名付けられている。事実、現代では世界最小の生物として名を馳せているほどだ、塗り替えられるかもしれんが。ようはこれの魔物版である。絶望的なほど覆せない数を、目視できないスパイとして使用し、小鳥の命令一つで細菌兵器に変わる魔物など、

「私の魔物は圧倒的なのではないか、恐らくは。」

と言えてしまうだろう、ファンタジー異世界人から見ると。

デメリットはあるものの、それを無くしてしまうほどメリットが大きすぎるのだ。潜在的に抱え、相手の命令で雲の上まで昇ってしまうなど、初めから絶望しか待っていない。戦いとは始まる前に勝負が決まっているのだ、マイコプラズマもといサイコプラズマが一匹でも残っていれば滅びないなど、不死身の何かとしか言えない。さらに、ダンジョンの影響を広げるには数が必要だ。勝手に増えて、自動的に影響下の範囲も広がるなんて素晴らしい魔物だ。コストパフォーマンスは不動の一位に輝くだろう。そしてファンタジー異世界人にサイコプラズマの仕業だと説明したところで、それを理解させるには科学の説明からになる。魔法文明に科学を持ってきても、文明に置き換えられなければ意味がない。では魔物だから、と安直に考えても寄生される前から、マイクロ単位で対策を行っている者でなければ細菌の思うがままだ。やつらの世界は人間が考えるよりはるかに小さいのだ。寄生されたとしても気づかなければ意味がないし、細胞内に寄生するため普通に魔法をかけてもスキルを使っても通じない、体全てが炎に変わるとかなら有効だろうが。そもそも、認識すらしていないものをどうやって駆逐するのか、発想よりも技術の問題になってくる。妄想の中では完璧なのだ、現実が追いつい

て来ないだけなのだ、など言い訳にもならん。マイコプラズマもといサイコプラズマの脅威は天井知らず、余談だが、むしろどうでもいいことだが細菌兵器は存在すら認めてもらえない代物だ、人類滅亡が核より安く買えるなど許せないのだろう、可能性はあっても実現してしまっては、軽く傘のゾンビゲームより悲惨な目になること請け合いだ。

「一匹いれば十分だろう、魔力コストが１の魔物にしては上出来な部類だ。」

＜＜そもそも、小さすぎてコスト１でも多すぎるくらいですよ。だとしても驚異的なほど出来すぎていますが。＞＞

「まあ、あちらの世界は狂気の度合いが違いすぎる、細菌兵器なんてハンバーガーのケチャップのようなものさ、神の杖はフライドポテトだ。なんて例えたお偉い人がいたくらいだ。」

＜＜地獄が生温いとか言いそうですね。＞＞

「政治屋の考えは理解したくないものだ。」

そう言いながら、一匹の細菌を世界に解き放った。

少女、Q. ファンタジーに対抗。A. 醜い政治と圧倒的科学力。的な。（後書き

A. 難しいのが悪いんだ、偉人はやっぱり偉人だった。

少女、怪盗男の娘を捕まえる。いや相性が悪いっす。的な。（前書き）

怪盗紳士は3回くらい捕まっているそうです。

少女、怪盗男の娘を捕まえる。いや相性が悪いっす。的な。

ファンタジー異世界と聞いて、どんな世界を想像するか。絶対とは言わないが大体は中世ヨーロッパの世界観を含んだものを想像するだろうか、事実この世界もそういった欧州文明を土台にして発展している。いつからその様なイメージを持ったのかはわからない、恐らくではあるが文明開化あたりからが始まりなのではなかろうか。これは日本文化、いや日本から見てのことだろうし、逆に海外から見れば日本の武士道とか、そんなものに不思議と目が向いてしまうのだ。つまり、日本人からすると無意識に、西洋文化に目が行きがちになっているとも言えなくはない。中華やエジプト、ヒンドゥーなどは西洋文化に先を越された形になっているらしく、印象は薄いものになってしまった。時は流れて現代、娯楽文化が発展している中でゲームのジャンルで人気を博したものがそこそこ出るようになった。やはりと言うべきか、またかと言うべきか。竜を退治する勇者と言った中世ヨーロッパの世界観が強く印象に残っていく。それだけではないし、三国志やアラジンなどなど、印象に残るのだが何故か、ファンタジーといえば中世ヨーロッパと答えてしまう。陰陽師でも道(タオ)や功夫、チャンドラマハールとかファンキーミイラ、あまり出てこない印象がある。やはり魔法がリスペクトされすぎたのか。

話は変わるが、そんな中世ヨーロッパの異世界ファンタジー。場所はアザンの街、歓楽街。中里司は拠点を探していたのだが、二度見をしてしまい、さらに目をこすって三度見して無視できなくなった建物の前で途方に暮れていた。

＜＜さあさあ皆さん、お立ち寄り。商人泣かせの一店舗、揃えて見せましょ新商品。必要なものは何ですか？ようこそ、コンビニエン

スストアへ！！＞＞

「うわ、ファンタジーの夢を叩き壊された気分っすよ、コンビニって、えぇ……。」

コンビニエンスストア。現代では割とありふれている子商店、チェーン店といったもので、ある程度の都会では見つからない方が不思議と言えるほどに溢れている建物だ。また、あまり知らなかったりすることではあるが、いやそもそも考えようとも思わなかったりするが、引きこもり否、立てこもりにはパラダイスである。腕を後ろに回されてしまうが、外に出なくても生活サイクルが完結してしまえるのだ。コンビニが外にあるという現実は無視したものとする。

「……行くっすか、ご同輩だったりすれば話くらいは聞いてくれそうっす。」

チリリン。聞こえのいい小さなベルの音色が、開けられたドアに合わせて鳴り響く。コンビニの中は、まさしくコンビニと言える雑多な雰囲気がしていて、しかし木造建築から落ち着いた雰囲気も窺える。旧校舎の廃れた図書室といった感じだ。

「Oh,（おや、）Well, well.（これはこれは。）Is（初）Nice（めま）to（し）meet（てか）you,（な、）the（お）customer?（客さん）」

「えっ、あ、初めましてっす、店員さん。」

そこには少女がいた、普通のとか可愛いというよりは美人と言える容姿をしている、背中まで流した黒髪はヘアアイロンをあてたのか毛先が縦巻きになっており、左耳に髪をかける仕草が妙に似合って

いる。会計台の奥で安楽椅子に座って寝ていたのか、小さく口を開いてあくびをしているのを手で隠している。そんな仕草ですら、彼女らしいとどこか頭の隅で考えてしまう。何よりも目を引くのは、全身真っ白のセーラー服であり袖口やスカートの裏生地にレースをあしらっている。異世界にセーラー服がないとは言えないが、コンビニエンスストアに続きセーラー服ときて英語で話しかけてきたのだ。

「……えっと、異世界から来た人っすよね？」

「面白いことを聞くな、異世界に来てから、あなたは異世界人(アルセーヌ)ですか。なんて尋ねるのか。まあ、その通りだと答えよう、怪盗男の娘、中里司(リュパン)？」

「…………。」

司は黙ってしまう。それはそうだろう、初対面の相手にいきなり怪盗であることと、名前を当てられたのだ。言葉を失ってもおかしくはない。

「おや、どうした。自分の名前と職業(ロール)を当てられたくらいで黙っていては、まだまだだぞ？」

「……誰っすか？」

「ふむ？かの怪盗であれば名探偵ですらやりきった実力で調べて見せるんだが、成りたてには厳しかったかな？」

「まあ、そうっすね。足りないものは沢山あるっすよ。」

「卑下することはないだろう、そうだな、ここは伝記からホームズ（エルロック・ショルメ）のアナグラム。または遅かりし名探偵（シャーロック・ホームズ）とでも言っておくか。」

「つまり、自分で調べろってことっすね。」

「いやいや、そんな事は言わないさ。怪盗には探偵を用意するものだろう？それとも、私は銭形警部（ICPO）だって言うべきかな？」

彼女は何が楽しいのか、ニヤニヤとした顔でこちらを見ており、左腕で頬杖を突いて優雅に安楽椅子を揺らしていた。

「…あれっすか、鑑定でも使ってるっすか？」

「残念ながら、そんなものはないよ。強いて言うならば、”私は、君のことを君以上に知っている。”」

”不気味。”言刃に表すならばそう答える。司は初見で、彼女が人でありながら人ではない何かだと、頭の片隅で警鐘を鳴らしていた。いやおかしい。警鐘を鳴らすのはわかる、知られたくない事を知っていると言われれば、それは誰だって一瞬であろうとも警戒してしまうものだ。だが不気味とはなんだ。不気味、なんて読書感想文みたいな薄っぺらな紙に書かれて終わるだけの刃無しだろう。何もおかしな所はないはずだ。待て、と言いたい。何故そんな感想になった、おかしな所が無いなんておかしい。そんな事は考えないはずだ。原因があるとすれば――――

「ん？どうした、生まれたての小鹿のように足を震わせて。”まるで、自分の頭の中に別の誰かの考えが入り込んだような顔をしているぞ？”」

なるほど、彼女の仕業か、何故か納得してしまう自分がいた。だから、司は気を失った。

「……やりすぎたか？言葉を使って考えている限り、私の間合いなのだが。…ふむ、相手は選ぶべきだな。あちら側の人間だからといって、全員が全員何でも出来てしまう主人公だ、なんて勘違いしているわけではない、と。まあいい。ことり、は、てごま、を、てにいれた、ぞ！！っと。丁度、人の手が欲しかったからな。ダンジョンだからといって魔物はアルバイトしないし。」

怪盗は活動する前に捕まった。いや、相手が悪すぎた。何と言ったって"常識とファンタジーに対抗（ダンジョンマスター）"を座右の銘にするようなやつだからだ。

少女、怪盗男の娘を捕まえる。いや相性が悪いっす。的な。（後書き）

小鳥は無双はしません、爆走はしています。相手が対処できていないだけです。

言葉が武器ってどうやって気づくんだろう。難しいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0666cv/

少女、迷宮の主的な。

2015年9月23日12時49分発行